

アジアの友

The Asia-no Tomo

10-11

OCTOBER-NOVEMBER

2017

公益財団法人アジア学生文化協会 創立 60 周年 記念シンポジウム・式典





第16回ABK秋祭りを開催

2017年10月22日(土)、今年で16回目となる「ABK秋祭り」を開催しました。当日はあいにくの空模様でしたが、近隣の方々や卒業生など、400名を超えるお客様が来館され、留学生たちが腕を振った各国料理に舌鼓を打ちました。また舞台では留学生たちによる歌や踊り、演奏が披露され、大盛況のうちに幕を閉じました。



アジアの友

2017年10・11月号 第529号

目次

60周年記念シンポジウム

(公財) アジア学生文化協会 創立 60 周年記念シンポジウム
「アジアの人材育成と日本留学の課題」

- 2 ・プログラム、登壇者プロフィール
- 4 ・ごあいさつ
- 5 ・基調講演
- 9 ・シンポジウム
- 34 ・質疑応答

60周年記念式典

(公財) アジア学生文化協会 創立 60 周年記念式典
主催者・来賓あいさつ

- 36 ・小木曾 友 (公財) アジア学生文化協会 理事長
- 38 ・成澤 廣修 東京都文京区長
- 40 ・栞山 信也 一般財団法人 産業人材育成協会 理事長
- 42 ・スポン・チャユツアハキット 泰日工業大学 理事長
- 43 ・張 笑 ABK 学生フロア会長
- 44 ・ガンバダラーク・バツナサン ABK 学生フロア会長

知友会通信

MEMBERS

<表紙> 創立 60 周年記念シンポジウムの様子

(公財) アジア学生文化協会 創立 60 周年記念シンポジウム

アジアの人材育成と日本留学の課題

日時：2017年9月15日（金） 14:00～16:30

場所：文京シビックホール 小ホール（南2F）

主催：（公財）アジア学生文化協会 協賛：（公財）東芝国際交流財団

1957年に発足したアジア学生文化協会は、多くの皆様のご支援のもと、今年創立60周年を迎え、これを記念したシンポジウム「アジアの人材育成と日本留学の課題」を開催しました。本誌ではこのシンポジウムの模様をお伝えします。

記念シンポジウム プログラム

14:00	・ 開会 （司会進行）アジア学生文化協会常務理事 布施知子
14:00～14:10	・ 主催者挨拶 アジア学生文化協会理事長 小木曾友
14:10～14:30	・ 基調講演 曹 其鏞（百賢アジア研究院名誉理事長） 「アジア次世代指導者奨学金プログラム（AFLSP）創設と期待」
14:30～14:35	・ パネラー、モデレーターを紹介
14:35～16:20	・ シンポジウム
16:20～16:30	・ 質疑応答
16:30	・ 閉会

登壇者プロフィール

基調講演



曹其鏞（K.Y. Ronald Chao）

元 ABK 在館生、東京大学工学部卒、百賢アジア研究院 (BXAI) 名誉理事長、香港ノーベル・エンタープライゼス・リミテッド副会長。

パネラー

岡部洋一 (Okabe Yoichi)

前放送大学学長、東京大学 / 放送大学名誉教授。東京大学先端科学技術研究センター長、同情報基盤センター長を歴任。



スポン・チャユツァハキット (Supong Chayutsahakij)

元 ABK 在館生、東京大学大学院・工学修士、泰日経済技術振興協会 (TPA) 元会長、泰日工業大学 (TNI) 理事長、バンコク高速道路 (株) 取締役副社長。

ヘン・フチョン (Heng Fu Chong)

元 ABK・新星学寮寮生。京都大学卒、ドイツ在住、ボン大学で日本事情 / アジア学等の教鞭を執る。



李景珉 (Lee Kyung Min)

元新星学寮寮生、パリ大学政治学部卒、同大学院博士課程を経て京都大学人文科学研究所で学ぶ。京都精華大学、京都大学文学部講師を経て札幌大学文化学部教授。専門は、朝鮮政治史、国際関係論。

呂新一 (Lu Xinyi)

元 ABK 在館生、中国政府奨学生として来日。東京大学大学院・工学博士、米国、欧州の投資銀行、並びに大手邦銀でチーフ・ストラテジストを務めた後、金融コンサルタントを経て現在シンガポールの金融機関勤務。



モデレーター



符祝慧 (Foo Choo Wei)

元 ABK 在館生、日本大学芸術学部 / 東京大学大学院情報学環修士卒、シンガポール国営放送ディレクター、東京放送等を経て、シンガポール「聯合早報」東京特派員。

＜ごあいさつ＞

布施： こんにちは。今日は夏が戻ってきたような強烈な日差しですが、ようこそお集まりいただきましてありがとうございます。これから公益財団法人アジア学生文化協会創立60周年記念シンポジウムを始めさせていただきます。

今日は香港から、ドイツから、タイから、シンガポールから、それに在日の元在館生OB・OGにお集まりいただきお話しをしていただきます。お迎えしている皆さまは、日本留学終了後、様々な経験を積み重ねた方々ですので、今日は、よりグローバルな視点で、多様性に富んだお話が聞けるのではないかと、楽しみにしております。会場の皆様もどうぞパネラーの皆様のお話の中から今後を考える何かを掴んでいただけたらと思っております。

それでは最初に主催者の公益財団法人アジア学生文化協会小木曾理事長のご挨拶から始めさせていただきます。よろしくお願いいたします。



布施知子 ABK 常務理事

小木曾： アジア学生文化協会創立60周年の記念のシンポジウムの開会にあたりまして一言ご挨拶させていただきます。

まず始めに幸い台風が遅れ、今日は秋晴れのいい天気になりまして運が良かったと思います。本日は、ABK 第一期留学生の曹其鏞先生はじめ、かつて日本の大学や会社で勉強された方々、今は世界の各地で活躍している方々に、このシンポジウムを開催するにあたって世界各地から馳せ参じていただきました。

テーマは「アジアの人材育成と日本留学の課題」ということであります。日本からは前放送大学学長の岡部洋一先生にも来ていただいてまして、これから存分にグローバルな視点でこのテーマについてお話ししていただきたいと思います。どうぞ皆さま最後までごゆっくりお過ごしいただきたいと思います。ありがとうございました。



小木曾友 ABK 理事長

※ ABK は（公財）アジア学生文化協会（ASCA）が入居・運営する学生寮・研修施設「アジア文化会館」の略称。ASCA の通称ともなっている。

布施： それでは最初に基調講演から始めさせていただきます。基調講演は、1960年に完成した当財団の留学生並びに研修生の宿舎としてつくられたアジア文化会館（Asia Bunka Kaikan;ABK）の最初の留学生、第1期生として入寮した香港の曹其鏞さんをお願いいたしました。ABK 設立当初は創設者で初代理事長の穂積五一はじめ、職員も在館生も一丸となって新しい会館づくり、寮づくりに精力を注ぎ、有意義な時間と思い出深い共同生活を共に過ごされた曹其鏞さんは、ABK 滞在中様々な影響を受け、更に生涯続く友情も築くことができたと思っています。その曹さんが近年、小さい島の問題に端を発した中日関係の悪化を憂い、日

中の将来を担う若者を育てないと、私財を投じ中国の大学に中日の学生が共に暮らせる寮建設を考え、実現させました。現在は、中国の5大学に中日の学生だけではなく、中国に留学している広くアジアからの留学生の暮らす寮になっているということです。更にその後、アジアの将来を担うリーダーづくりのための留学生奨学金事業も立ち上げておられます。そこで、曹さんがこれらの事業を始められた思い、現状、今後への期待等お話しいただき、ぜひたくさんの方々を知っていただきたいと、本日の基調講演にお迎えしております。

それでは曹其鏞さんよろしくお願いいたします。

<基調講演>

「アジア次世代指導者奨学金プログラム（AFLSP）創設と期待」

曹 其鏞（そうきよう） 百賢アジア研究院名誉理事長

曹： みなさん、こんにちは。小木曾さんと布施さんからこのシンポジウムで話をしたいということを頼まれた時、私は大変躊躇しました。長いこと人前で日本語で話をする機会はあまりありません。しかし、ABKの60周年という大変意義ある機会ですので、頑張ってみようかと思いました。ですからあまり上手ではない日本語ですが、我慢して聞いてください。

布施さんから20分話してくださいと言われて、原稿を書こうとしたんですが、なかなか書けなくて、ざっくばらんな話になりますが、お許してください。

60年はたしかに長い時間だと思います。しかし私みたいな老人にとってはそうは感じません。振り返ってみると、60年前のことはよく思い出せますが、昨日一昨日のことはなかなか頭の中に浮かんできません（笑）。

私は昭和33年（1958年）に来日しました。当時、最初の二年間は下宿生活でした。1960年にアジア文化会館（ABK）ができて、その時点で運良く入ることが出来ました。当時は会館の施設は大変贅沢で、学生にとっては考えられない個室で電話付きでした。当時電話付きというのは大変珍しいことでありました。しかも部屋代はたしか約3,000円だった

んです。ですから我々にとっては入ることだけでも宝くじが当たるようなことでした。

また、ABKに入ったことによって大変いろいろな勉強ができました。一つ私の一生に影響したことは、やはり穂積先生及び職員、在館生のみなさんから学んだことです。いろいろな国々の友達と一緒に生活をしたことで、深く感じたことは、国が違って人も同じだということです。ですから、そういった交流ができる場所で一緒に生活することによって、なぜ国家間にはいろいろな問題があるのだろうかということを痛感しました。そういったことで、ABKでの経験は大変私の印象に残りまして、私の一生に大きな影響を与えることになりました。国々の間でお互いもっと知り合うことは、我々この地域にいる人間にとっては大変大事なことではないかということです。

そして、大学を出てからはもちろん仕事のために一生懸命働きましたが、ABKでの生活を通じて得たこの理念はずっと私の頭の中に残っていました。そして、60歳を少し過ぎて仕事のほうはあまりやる事がなくなってしまい、何か挑戦をしてみたいと思ったわけです。当時は日中関係が大変難しい状態だったものですから、私は穂積先生の理念を真似て、まず中国で日本と中国の学生たちと一緒に生活させて、交流をはかってもらおうということをやってみようと思いました。これは完全にアジア文化会館の真似をただけなんです。そして、中国のあちこちの大学に話をしてみたのですが、最初の反応は大変冷たかったんですね。やはり学生の問題という



曹其鏞氏

のは中国にとっては大変敏感な問題ということで、特に留学生として外国の学生が入ってくるとなると、自国の学生が影響されてしまうのではないかということを、どこの学校のリーダーも心配していたわけです。

そうした中で、一番最初に我々のアイディアに対してやってみようと言ってくれたのは精華大学でした。なぜ精華大学がやろうと言ったかという、当時中国の教育部、日本でいうところの文科省ですが、中国の大学はこれからもっと国際化しなければならないということを言っていたということが背景にあります。

私がやろうとした宿舎は外国の留学生と現地中国の学生とを一緒に生活させるということに重点を置いていました。今まで中国の学校では、留学生には留学生寮があって、中国人の寮とは分割されていました。ですから当

時、6～7年前の話ですが、こうした寮を作るのは一種の慣例の突破でもありました。それで、精華大学がやろうということになったら他の大学もみんなやりたいということになっていったわけです。

私は当時、まずは1校から始めようと思っていたのですが、結局5校の大学にこうした中日青年交流会館を作ることになりました。ただ作っている時にもいろいろと文句や意見が出てきました。なぜ日本人と中国人しか入れないのかということで、もう少し幅を広げアジア学生交流会館になってゆきました。今は中国では北京大学、精華大学、上海の復旦大学と上海交通大学、浙江大学の5校にこういった施設があります。各宿舎100～120名の学生が入ってます。

我々は宿舎の建設だけではなくて、常にモニターをしています。宿舎がどういうことをやっているのか、活動はどうかといった意見交換を常にしており、また5校間の交流会も行われています。これをやり始めたとき、一番初めに日本に来て母校の東大にも行き話をしましたが、東大はなかなか難しかった。一番応援をさせていただいたのは早稲田大学と京都大学です。早稲田はちょうど同じ留学生寮を、こちらはアジアの青年だけのためではないのですが、学生寮を中野に作りました。総長の鎌田さんともいろいろ話しをしました。が、今大変立派な寮ができています。

この宿舎事業を始めて進めているうちに文句を言われたのは、ハードウェアを作るのは資金と場所があればできるけど、今は中身が大変問題になっているということでした。こ

のことを一番最初に言われたのは京大の学長と早稲田の学長、それから精華大学の学長です。どういうことかと言うと、大学に入ってくる留学生はなかなかアジアに戻らず、残らず、ほとんどが欧米に行ってしまうのではないかと。そこで何かをやりませんかと言われたんですが、我々社会人はそんなことができるんだろうかと。やはり学校でがんばってもらわないとなりませんが、自分たちに何ができるかということで日本の友達といろいろ相談したり、香港でもいろいろな人の話を聞きました。

そうしている間に、たまたまアメリカのブラックストーン・グループの創設者でスティーブ・シュワルツマンという人がいて、彼が精華大学に3億米ドル（約300億円）を寄付したんです。これは、アメリカの学生は中国にあまり留学していない。もう少し中国の現状やいろいろなことを勉強して理解しなければ、将来アメリカにとっては大変ハンディになる。そこで3億米ドルの大金を投じてシュワルツマン・インスティテュートを精華大学に作ったんです。私はこれを見て、もちろん真似はできませんが、もう一度社会人として何かやりたいと思い、最終的には百賢（Hundred Wise Men）教育基金を作ったんです。これは当初の考えではそれほど難しくないと思っていました。そして、シュワルツマン氏の計画を真似て寄付をしてもらおうじゃないかということで、日本にも中国にも行ったのですが、なかなかそう簡単にはいきませんでした。5年前ですね、とうとうまず自分の力で、微力ですがやってみようという



ことで基金を作ったんです。この基金に対しては日本の財界の方々からも大変応援をいただき、中国でも香港でもいろんな友達から応援していただきました。そしてその結果、今全部で14校の大学に対して奨学金を支給しています。日本では早稲田、京大、一橋、慶応、東大。中国では先ほどの宿舎のある5校に香港大学と中文大学が加わります。それから台湾大学、韓国のソウル大学が入っています。

現在は、そのような各地域の大学の学生100名に奨学金を出しています。我々の奨学金の特徴の一つは、留学生向けに出しているということです。その国の学生がその国の大学で勉強しても奨学金は出しません。中国の学生が日本、韓国、香港に行っても勉強をすれば奨学金を出しますし、日本の学生が中国、香港、台湾、韓国に留学すれば奨学金を出します。二つ目の特徴は、これはいろいろな友人から意見を言われてそうしたのですが、留学先の国の良いところをもっと見てもらおうということで、奨学金の額にしてみれば、ちょっと余裕を持った金額になっているということです。1人当たり年間2万5000米ドルを出しています。これであれば、いろいろ

なアルバイトをしなくてもいい。1～2年、滞在国のことをよく勉強していただくとうということになっています。

それからもう一つの特徴は、今申し上げたような奨学金対象校に入っている学生であればみんな質的に高いはずですよ。ですから奨学生採用に当たっては、いわゆる成績についてはあまりこだわりません。早稲田に入れる学生であれば早稲田の標準になっていますし、北京大学に入れる学生であれば北京大学に入れる能力を持っているでしょうから。そこで、我々が一番重点を置いていることは、いわゆるネットワークを作ってもらいたいということです。学生時代、大学での交流をはかっていろいろ付き合いをしてもらうということが大事ではないかと。

もう一つはそのネットワークをどういうふうに生かしていくかということに重点を置きましょうということです。そのため毎年奨学生は義務で全員サマーキャンプに参加してもらっています。奨学生が全員3週間以上一緒に共同生活をし、一緒に勉強する環境を作っています。1年目は中国の浙江大学でやりました。2年目は早稲田大学で、3年目の今年は台湾大学でやりました。来年は北京大学でやります。120～130名の学生と一緒に、約3週間生活をする中で仲良くなりますから、それは大事なことだと我々は実感しています。

その上にもう一つ、我々の責任としてOB・OG会を作りましょうということで準備をしています。これを作ることで、このネットワークがさらに長く生きるのではないかと

がんばっています。

私がこの場所を借りてみなさんに言いたいことは、我々が直面している一番難しい問題は日本の学生についてであるということです。日本の学生はなかなかアジアに留学しません。他のアジアの国々の学生もたしかに欧米にたくさん留学していますが、絶対数が大きいので、優秀な奨学生数は揃います。日本人は中国、台湾、香港で学んでいる人はそれほど多くないので、奨学生の対象者が大変限られています。なんとか、日本から優秀な人材を集められないか、今一番頭が痛い問題になっています。そういう点で、特にここに教育関係の方々もおいでになると思いますので、いろいろ助けてもらいたいと思っています。

<シンポジウム>

布施： それではこれからシンポジウム「アジアの人材育成と日本留学の課題」ということで、5人のパネラーとモデレーターで進めていただきます。みなさんは、私どものアジア文化会館ならびにアジア文化会館の母体となりました新星学寮に学生時代のある時期を過ごされていた方ばかりでございます。

最初にパネラーのご紹介をさせていただきます。一番向かって右側におりますが、岡部洋一先生です。今年の3月まで放送大学の学長さんでしたので、みなさんの中にはテレビで先生のお顔を拝見

私がやっていることのほとんどのことは、60年前にアジア文化会館で教わったこと、印象付けられたことをもとにおこなっているんです。穂積先生は当時既に約3週間かけた北海道旅行を実施していました。(1958年～1966年；5回実施) 今から約60年前の話ですが、私はいまだにその時のことをよく覚えています。あの時代に一緒に旅行した人のことはいつも頭の中に浮かんできます。これこそ私は必要なことではないかと考えてます。

そろそろ20分になるでしょうか。ありがとうございます (笑)。

布施： 曹さんありがとうございます。曹さんはいつも英語でのご挨拶や講演でしたね。お疲れさまでした。

していらっしゃる人もおいでではないかと思っています。放送大学の前は、東京大学工学部で教鞭をとっていらっしゃいました。なお、岡部先生は当協会の前常務理事の工藤と大学が



同期ということで、協会の評議員になっていた
ただき、現在は新しくできた ABK 学館日本語学校の理事をお願いしております。これからの新しい学問のトレンドなどを伺えればと思っております。

お隣は今回タイから来ていただきました
スポン・チャユサハキットさんです。バンコクの泰日経済技術振興協会（TPA）の創設にかかわり、これまで TPA の活動を発展させてきた中心的な方です。またその後、泰日工業大学（TNI）の創設にも中心的役割を担われ現在初代の理事長をなさっております。今日は、スポンさんには TNI における人材育成のお話しが伺えるのではないかとと思っております。

そのお隣は、ドイツから来ていただきました
ヘン・フチョンさんです。ヘンさんは日本に留学された時はマラヤ連邦の出身でした。しかし日本滞在中にいろいろのことがありまして、結局マレーシアには戻らず、ドイツに行かれ長年ドイツで暮らしています。そしてドイツからアジアをウオッチしておりますので、日本にいては見えない視点からのお話が伺えるのではないかとと思っております。

そのお隣は李景民先生です。韓国のご出身で、来日後新星学寮に入寮、その後フランスに渡られパリ大学に入り、博士課程まで進まれていますので長期間留学生としてフランスで滞在しておられました。そして、卒業後再び研究のため来日し京都大学で研究生活を続け、その後札幌大学で長年教鞭を執られておられました。ご専門は政治学、朝鮮史ですが、本日はテーマにそったお話をお願いいたして

います。

お隣が呂新一さんです。呂さんは中国政府派遣の留学生で 1982 年に来日し、東大工学部で博士号を取得していますが、現在は金融アナリストとして、シンガポールで仕事をなさっています。呂さんはこれまで日本、アメリカ、シンガポール、中国など、様々な国で活躍しています。グローバル化が進む時代、実体験をお持ちの呂さんには、今どういう人材が必要なのか、どんな問題があるのか、そんなお話がお聞きできればと思っております。

最後にご紹介いたしますのは、モデレーターとしてシンポジウムを進めていただきますシンガポールの符祝慧さんです。長年日本で、シンガポールのシンガポール・プレス・ホールディングス（聯合早報）の東京特派員として活躍しています。

それでは符さん、そしてパネラーのみなさん、どうぞよろしくお願いいたします。

符： 皆さんこんにちは。本当にお忙しい中、この会場に来ていただき、わたしたちもとても嬉しく思います。今日の進行として、最初はアジアの、私たち元日本留学生の先輩の皆さんからのお話を聞いて、その後、岡部先生にバトンタッチをして総括ということでまとめたいと思います。

まず、それぞれ 15 分でお話ししていただきます。パネラーの皆さんの共通点はアジア人であるということです。東アジアの韓国と中国、東南アジアのタイ、マレーシア、私はシンガポールです。全員元日本留学生ですね。



符祝慧 (Foo Choo Wei) 氏

では最初に大先輩の、ドイツ在住で元マラヤからの留学生ヘン・フチョン先生からお話をお願いします。

ドイツから考える 日本の外国人、留学生受入れへの提案

ヘン： みなさん、こんにちは。ヘンです。私はドイツで長く生活しています。ドイツでは留学生として、また労働者として、そして移民として生活してきました。だから私は今日留学についての3つのキーワードを使って話をしたいと思っています。

まず最初に、留学というのは、昔から若者がどこかの国へ行って勉強し、そして勉強が終わったら国へ戻って、末は博士か大臣かという期待をされていました。例えば幕末や明治初期に日本から欧米に行ったみなさんはそ

うだったわけです。あるいは中国の留学生も日清戦争以降、日本に行って学び、帰国して軍人になったり、革命家になったり、という時代がありました。ところが現代になると、留学生というのは行ったり帰ってこないという人が非常に増えてきているわけです。特にアメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドなどは移民国家ですから移民法があって、そこに留学して、仕事が見つかればそこに残ってその国民になったりするわけです。

ところが、ドイツ、あるいは日本という国は移民国家ではなく、移民法也没有。留学生として来て勉強してもらい、帰国してもらうというのが原則です。しかし、ドイツは1990年代に東西ドイツが統一してから少し違ってきます。日本の場合も勉強したら帰ってもらうというのが原則ですが、実際統計を見てみると、中国の留学生だけを取り上げて見ても、1980年代に日本に来た中国人留学生のうち、これまでにだいたい十数万人が日本国籍をとっているわけです。ですから実質上日本も移民国家になっているわけですね。本音と建前がありますから、その辺りははっきりとは言われていません。そうした実態があるので、日経の評論家が日本でも移民局をつくれと提案していました。

ドイツも、今でも原則としては移民は正式には認めていません。まだ移民法はありません。しかし、今度の9月24日に総選挙がありますが、その争点の一つは移民法を作るか作らないかということになっています。事実上、ドイツの8,000万人の人口の約22%の国



ヘン・フチョン氏

民が、或いは住民が、何らかの移民の背景を持っています。ですからその点で、これから留学生を増やそうとしている日本は、留学そして移民ということを真剣に考えなければいけないと思っています。

このあいだ読んだ新聞によると、安倍首相が向こう5年間に150名のシリアの難民を留学生として日本に迎えるという記事がありました。これは移民だけではなくて、難民の問題にもなってくるわけですね。ですから今度みなさんが留学ということを考える時は、移民と難民のことを一緒に考えなければならぬ局面に来ているということです。これが一つです。

その次は、これはドイツの経験ですが、宗教の問題です。イスラム教の問題です。ドイツは第二次世界大戦後、中近東からの留学生がたくさん来ました。トルコやイラン、エジ

プト、北アフリカの人たちで、その中の多くがイスラム教の方々です。ところが90年代まではもちろんイスラムの国からの留学生は宗教のことをあまり前面に出しませんでした。例えばドイツではイランの留学生は猛烈に昔の国王（シャー）に反対していて、自由と民主、反圧政を訴えていたので、宗教の問題は前面に出てはいなかったわけです。だから当時たくさんの留学生がイスラム教の国から来ていましたが、宗教、イスラムの問題はほとんどありませんでした。ところが70年代になって、これは私個人の経験でもあります、サウジアラビアにワッハーブ教派というのがありますが、これはサウジアラビアのイスラム教の中の最も保守的な教派で、ワッハーブ主義、いわゆる原理主義を唱えています。サウジアラビアというのは石油でお金がたくさんあるので、それでワッハーブ教派の教徒たちと組んでヨーロッパ各国で、イスラム教徒の留学生たちの中で積極的な活動を行っています。私はロンドンに行ってその活動実態に接しましたが、その影響でマレーシア人留学生でも非常にラディカルな学生が出ているわけです。同様にフランスにもドイツにも広がっていて、やがてイスラム国（IS）へと繋がっていくわけです。

私はイスラム国あるいはワッハーブ教派、あるいはムスリム同胞団という組織は、イスラム教に基づいた国家を全世界的に普及させていくつもりなのだと思います。やがて力を持ってイスラム教の教法を憲法に取り入れようと考えているのでしょう。そういうことも含めて全体的に見なければなりません。要す

るにイスラム国がテロを行っていますが、これは手段です。これから世界においてイスラム教を普及させていこうという、これは戦闘部隊だと私は考えています。

三つ目ですが、戦後日本は1950年代から留学生を受入れ始めました。アジア学生文化協会の歴史を見ても60年になったわけです。この60～70年間、留学生はたくさん日本に來ているわけですが、これまでの留学生の歴史、戦後の日本における留学生史の研究というのはあまり聞いたことがありません。例えば日本の場合は1960年代に早稲田大学の実藤恵秀先生が『中国人日本留学史』という著作を出しましたが、私の希望としては、これから日本が将来に向かうには過去も少し見なければならぬと思っています。アジア学生文化協会の機関誌『アジアの友』(1958～現在)にもかなりの資料があるわけですから、それ等を活用する。例えば日本の場合、私の個人の経験からしても、1950年代は東南アジア、香港、台湾からの留学生が來ました。1960年代にはインドネシアの賠償留学生がかなり來ています。その後1980年代には大量の中国人留学生が來たわけです。ところが、例えばインドネシアの留学生のその後は誰も知らない。インドネシアの1965年の大虐殺で日本に來ていたかなりの留学生が国に帰って、その後消息不明と聞いています。あるいはベトナム戦争の最中に日本に留学していたベトナムの留学生のその後など。そういう日本の歴史にとっても非常に重要な一部分としての留学生史を、誰か大学の学者や歴史学者たちにごんばっていただき、ぜひ戦後の日本におけ

る留学生史を出していただきたいと思います。私からの提案です。

符： ヘン先生ありがとうございます。ドイツに軸を置いた目線で留学生の問題などもはっきりと提起していただくことができました。最近ではアジアの激動の時代といえますか、今朝もテレビで見ましたが、東アジアはかなりどこから見ても激動なんですね。北朝鮮のことなど、皆さんの関心事だと思います。今日のご専門の、韓国出身の李景民先生がいらっしゃいます。テーマに沿って、よろしくお願い致します。

海外で学ぶ意義と 留学生が社会に与えるインパクト

李： 私が生まれ育った国、韓国を離れて50年が過ぎてしまいました。フランスで10年、日本に來て40年が経ちました。今日、アジア学生文化協会創立60周年の記念シンポジウムで、私は、2つのことについてお話ししてみたいと思います。

まず一つは、国境を越えるということはどういうことなのかについてです。英語で「外国に行きなさい」という表現はみなさん知っていますね。“GO ABROAD”。この通り言葉は、とてもチャーミングな表現です。何とかありますよというようなニュアンスを含んだ言葉でもあります。

外国で学ぶ意義は何でしょうか。外国では生活環境が自分の国と違って、新しいことがいろいろと発見できます。1年、2年と時間



李景珉 (Lee Kyung Min) 氏

が経つに従って、色んなことを学ぶようになります。例えば、他者との共存が大事だということを痛感するようになります。そして自分の国の文化を、相対的に見るようにもなります。他者に対して寛容にもなれるのです。外国の社会を、歴史などを学んで、いつか自分の国に戻ると、こういうことが役に立つのではない、社会の近代化にも貢献できるのではない、などを思うようになります。

私は、今から20年ほど前、1996年11月、札幌大学の同僚教員4人と一緒に、留学生募集で中国の内モンゴル自治区の首都であるフフホトに行ったことがあります。フフホトは、北京から飛行機で約1時間のところで、モンゴル高原の入り口にある人口100万人の近代的都市でした。

私たちは、フフホトの大学と日本語学校を訪ねて行き、そこの学生たちに、日本留

学について説明し、留学を誘うキャンペーンを行ったのです。私たちが中国に行った理由は、2年後に札幌大学に新たに文化学部を設置することを文部科学省に申請していたのですが、その設置条件に、文部科学省から留学生を入れることを指摘されたからです。

ところでその時、私が学生たちの前で話すことになりました。私は、高校を卒業する頃の私自身の気持ちを、そして日本とフランスの大学での体験を、50人近い学生たちに話しました。

日本で私は、アジア文化会館と兄弟関係にある新星学寮で生活しました。日本人の学生たちとの共同生活を通してたくさんのことを学びました。朝一斉に起きて寮内を掃除し、朝晩の食事は寮生が当番制で台所で炊事をしました。月に一度は寮会があって、時にはベトナム戦争についてみんなで討論しました。生まれてはじめての民主的な共同生活の体験でした。

間もなく私は、日本を出てフランスに行きました。丁度、1968年5月、世界を風靡した「5月革命」の直後であり、大学は学生運動の熱気が充満していたのです。専門の勉強をすると同時に、時代の閉塞状況を感じ取った若者たちの反乱を私は目の当たりにして、そして色んな社会体験から学んだものは多かったのです。

そして最後に、私は学生たちに、「海外へ行きましょう。日本に、札幌に来てください。きっと、大きな収穫を得ることが出来ます。」そんな話をしたのです。

さて、この外国に行こう、という話は、後

にある韓国人の憲法学者が書いたエッセイ集の中にも書かれてありました。著者は兪鎮午(ユ・ジノ)という人です。この方は今のソウル大学の前身の京城帝国大学の出身です。昔、朝鮮半島が日本の植民地下にあった時代に、ソウルを京城と呼んでいました。植民地当局が1924年に京城帝国大学の予科を、26年に法文・医学部を開設し、41年に理工学部も増設して、当時の朝鮮半島では唯一の総合大学であったのです。その京城帝大に兪鎮午さんは優秀な成績で入るんです。ところで、彼より成績が悪かった高校時代の仲間の中には東京の大学に進学した人もいました。

夏休みになり、東京の大学に通っていた友人たちとソウルで集まりました。みんなが集っては騒いだりする席で、兪さんは大変驚くわけです。彼より勉強もしなかった人が、半年くらい東京のどこかの私大で勉強して国に戻って喋っているのを見ては、驚いたのです。植民地の首都ソウルで勉強していた兪さんには、親友の振る舞いを通して、当時の東京の文化的水準や、大学の実態が伝わってくるようで、羨望の的であったということなんです。

兪さんは後に大学教授になって、1948年8月に今日の韓国、大韓民国が誕生しますが、その時韓国憲法の草案を作った学者です。彼は学生時代のあの体験から、社会人になってからずっと追求したことの一つは、「時間があれば、外国に行こう、外国の進んだ文化を、社会状況を見て歩きたい」、それを実行していったのです。彼は学生たちに「できれば海外に行ってみたらどうか」、そんなことを言

い続けたそうです。われわれが故郷を離れて大都会に行っては、故郷では得られない何かを得ることもあるのではないのでしょうか。それは、貴重な体験であるに違いありません。

さて、もう一点は、日本に来ている留学生の多くは、韓国、中国、ベトナム、東南アジアの国々からのみなさんであり、彼らは、現代史を背負っているということ、それについてのお話です。

日本の若者が現代史を背負って生きていないとは言わないにしても、日本の若者以上に、現代史を生きているということで、彼らは大変な状況にあるということです。勉強するだけじゃないということ。彼らには国の貧困、国の混乱状況、お国では独裁政治が幅を利かせているという現実があります。それを忘れて勉強だけするわけにはいかないのです。

留学生が外国で暮らすとなると、受入国の人々にはどんな影響を与えるのでしょうか。「アジアの留学生の場合」を一つの例にお話ししてみたいと思います。

私は1969年から10年間パリで暮らしました。当時フランスには韓国出身の方は700人くらい滞在していました。今は万単位です。当時、同じフランスに住んでいても、同胞同士でしょっちゅう会うことはありませんでした。学生の場合は、勉強が忙しい等々の理由で。私は、一年中一人の韓国人にも会ったことのない年がありました。大学の勉強、アルバイトなどで普段非常に忙しくて、暮らしも楽ではありませんでした。ただ、学生の場合、フランスの大学は休みが長くて3か月もあるんです。一生懸命バイトでお金を貯める

人もいれば、余裕のある人は隣のドイツに旅行に行ったりすることも出来るんです。

フランスで孤独な日々を送っている一人の韓国人の青年にとってみれば、通り道で、東ベルリンであろうと、同胞に会った時、それは嬉しいことです。パリ市内では韓国人に会うことはめったにないけれど、会えたらどんなに嬉しいかということです。韓国のニュースにも飢えていたのです。私は新聞が大好きで、たまに大使館に行くと新聞がそこに積んであります。「これ、もらっていいですか?」と聞いて、全部もらっては家に帰って一晩中読んだりしていました。

こういうふうに孤独な日々を送っていた人たちが、彼らにとってみれば、韓国を離れてフランスにいと、朝鮮半島が置かれている状況がよく見えてくるのです。朝鮮分断の歴史に、南北のイデオロギーの対立にかくも翻弄されたのはなぜか、などを考えるようにもなります。

ということで、ソウルの真面目な「一般市民」とはちょっと違っていくわけです。より自由に、時には民主化運動にも参加して、行動もしていたことになります。

ところで、1967年7月、突然韓国で、「東ベルリン事件」という事件が新聞に大きく報じられました。西ドイツ、フランスで学んだ韓国出身の知識人、留学生など40人が突然、韓国の中央情報部、KCIAともわれわれは呼んでいましたが、政府機関によって韓国に帰国させられたのです。ヨーロッパ帰りの国内の人々も多数逮捕され、当局の調査を受けることになりました。

事件の内容は、東ドイツの北朝鮮の工作員に誘われて、韓国の知識人たちがスパイ行為をしたとのこと。それは韓国の反共法に抵触することになるからです。

1989年以前のドイツは東西に分断されていました。東ドイツの首都はベルリンで、東ベルリンです。西ドイツはボンが首都でした。その東ベルリンには北朝鮮の大使館がありました。その東ベルリンの大使館を拠点にして北朝鮮の工作員が韓国人に接近していたということです。

フランス、ドイツに住んでいた韓国出身の知識人、留学生たちは東ドイツに行ったりしながら、北側のスパイ教育を受けたということです。彼らはソウルに連れて行かれては尋問を受け、裁判を受け、牢屋にも送られたのです。

問題は、自国の同胞であっても、国家機関が同胞を自国に無理やり連れて行くということとはできないということです。韓国政府はドイツ、フランス政府の了解を得ずにそんなことをしたのです。それでフランス、ドイツ政府から猛烈に抗議を受けましたし、フランス、ドイツの一般の人々の間でもこんな非人道的なことは許さない、ただちに彼らを元に戻せという抗議運動が活発に行われました。この事件で韓国の非民主的な政治状況が世界に広く知らされたことになります。

フランスから連れて行かれた方の中には、有名な画家もいました。ドイツからは有名な作曲家も、学者もいました。韓国に連行され、無期懲役の判決を受けた人もいます。しかし、しばらくして、みなフランス、ドイツに戻り

ました。

2006年1月、韓国の情報機関、国家情報院の「真相究明委員会」は、東ベルリンで北朝鮮当局者と接触していた大学教授や留学生などが集団スパイとされた「東ベルリン事件」は、ねつ造だったと発表しました。真相究明委員会は、当時の朴正熙（パクチョンヒ）政権が北朝鮮との接触を無理やり国家保安法違反に結びつけたと断じたのです。

この事件をきっかけに、フランス人のご夫婦ですが、韓国の人々の人権を守るための、小さな団体を作りました。そして、今のソウルはどういう状況にあるのか、それをフランスの人々に紹介して、何か協力できることはないだろうか、牢屋にいる政治犯たちをどうすれば自由にできるのだろうか、ということに熱心に活動していたのです。旦那さんは国家公務員で、日本だと上級官僚の方なんです。しかし彼は、その団体に所属して留学生たちの世話もするし、新聞に韓国のニュースなどが出ていると、それを集めて、フランスの一般の人々に今のソウルはこういう状況にあるということを知らせたりしていました。こういう状況というのは、韓国では、朴正熙政権、軍事政権時代のことです。1961年5月に軍事クーデターで権力をとったパク・チョンヒ政権のことです。彼が亡くなったのは1979年10月で、18年間も軍事独裁政治を行ったのです。その後は一時、ソウルの春が訪れた時もありました。ところが1980年から88年まで、これまたひどい軍事独裁の時代となり、その時、韓国の人々はまた、当局よりひどい弾圧を受けるようになります。そのとき、フ

ランス人たちは再び立ち上がり、韓国の民主化闘争運動に対して、われわれフランス人が単なる「モラルでもいい」、何か精神的にサポートできないだろうか、といった運動を行っていたのです。本当に頭が下がるご夫婦の話です。みなさんご存知だと思いますが、フランスのジャーナリストでロベール・ギランという方、フランスの高級紙ル・モンド紙の記者で、何年か前に亡くなりましたが、この人がまた熱心にこの団体にいろんな情報を送ってくれたりしていたのです。

最後に、もうひと言を申し上げて、お話を終わりにしたいと思います。

今日、日本は政治・経済・文化などの面で、アジア諸国と互に行き来しています。したがって、今の日本を理解するには、隣国の視点も大事でしょう。日本で学び自国に戻った留学生たちは、日本での見聞を広く紹介する。日本との掛け橋になって、活発に行動するようになります。

一方、日本人にとっても留学生との交流があるわけでしょう。ニュースの国の人が隣に座っている。よく私は、パリで体験したことです。日本でも同じことがいえるわけでしょう。まさに留学生たちの存在が、日本社会に、われわれに与えてくれるインパクトがあるわけです。その影響が、ある意味では日本人の意識の変化にも繋がっていくのではないのでしょうか。

それで、われわれが何らかの行動を起こすことにもなるのです。それこそ何よりではないかと、私は思っています。

日本と韓国、中国、あるいは東南アジア

諸国とは、今や互いに相手を語らずに自分の国の今の状況は語れないようになっているのではないのでしょうか。何か、われわれが出来ることを率先してやっていく、そんなことを思っております。ご静聴ありがとうございます。

符： どうもありがとうございました。やはり、アジア学生文化協会の60年は私たち留学生を育ててくれ、その中にはアジアと密接な歴史もかなりあり、様々なことが長く連なって今日があると思います。また、留学生が外国で勉強して一人前になることも大事だと思っています。次は、帰国後長年タイで産業人材育成に取り組んでいるスポン・チャユツァハキット先生にお願いいたします。

タイの教育事情と 元日本留学生が取り組むタイの人材育成

スポン： みなさんこんにちは。ご紹介いただいたタイのスポンです。私はタイの人材育成について、さらにその事例として我々が運営している泰日工業大学（TNI）の話をしたと思います。まず簡単にタイ国の教育、人材育成の背景を紹介いたします。

タイ国の人口は現在約6,600万人です。第2次世界大戦が終わった時の人口は約2,000万人ですから、この70年くらいの間に3倍以上になりました。

ではタイの教育制度がどうなっているかというと、平均教育水準は現在、中学2～3年



スポン・チャユツァハキット氏

です。戦後から1950年頃には小学4～5年でした。タイの教育制度は、戦後小学校・中学校・高等学校が4年・6年・2年制でした。その後7年・3年・2年制になって、現在は日本と同じ6年・3年・3年の制度になっています。また、義務教育は、1945年～1950年まで小学校の4年から中学1年（グレード7）になりましたが、現在は中学3年になっています。これにより国民の教育水準が飛躍的に上がってきています。ただ、全国水準が上がるには時間がかかります。バンコクのような大都会には学校がたくさんありますが、田舎の街ではそうではありません。だから義務教育は中学3年ですが、国全体を見ると中学3年までっていないのが実情です。また地方には高等学校があまりありません。

人材の育成は国の教育システムと関連しているので、実態をよく知っておかなければな

タイの教育・人材育成 ●参照先: NSO(タイ国統計局)などから作成

主 題	2017年現在	参 考
1 人口	65.93百万人	20.61百万人(第2次大戦後-1950年)
2 平均教育水準	中学2-3年	小学4-5年(第2次大戦後-1950年)
3 義務教育	中学3年	小学4年→中学1年(グレード7) (第2次大戦後-1950年)
4 教育制度	6-3-3	4-6-2→7-3-2(第2次大戦後)
5 大学数 (国公立163+私立74→)	237	5大学(第2次大戦後-1950年) *教育省以外の貴族大学校等を含む
6 6.1 高卒学生数	563,488人	
6.2 高卒後進学	433,886人	
6.3 全高卒の高等教育進学率	77%	
7 国公立大対私立大入学比率	82%:18%	357,311:76,575
8 8.1 労働人口総数(15-60歳)	55.82百万人	全人口の84.66%
8.2 大卒以上の労働人口	9.86百万人	全労働人口の17.66%
8.3 科学技術専攻大卒以上の労働人口	2.4百万人	全労働人口の4.30%
8.4 社会科学・学術・教育専攻大卒以上の労働人口	7.46百万人	全労働人口の13.36%
8.5 大卒以上の労働人口で科学技術・社会科学専攻対比	24%:76%	

りません。今、タイには237の大学があります。そのうち国立大学は約2/3の163校、私立大学は74校です。60～70年前には5校ほどしかありませんでしたから、大学数は大幅に増えたことになります。なお、最近の高校卒業生数は年間約56万人です。そのうち更に上の高等教育に進学する人は約77%です。この数字を見たら悪くはないですね。最近ではかなりの人が高校まで行って更に上まで進学していることが分かります。ただ、その内容を見るとまだいろいろな問題が残っています。

例えば国立大学は160校ほどありますが、それらはみな規模が大きいのので、80%以上の学生がそれらの国立大学に入っています。一方多くの私立大学は小規模で、あまりたくさんの学生を受入れることができないのが現状で、私立大学進学者は20%以下です。また、タイの労働人口は、15歳から60歳までが対象となっていますが、現在は約5,500万人です。全人口の約85%に当たります。そのうち大卒以上は約17%。その内訳を見ると、科学技術専攻大卒は約43%だけです。また社

TPAとTNI関連年譜

1957.09	(財)アジア学生文化協会(ASCA)設立
1959.08	(財)海外技術者研修協会(AOTS)設立
1960.06	アジア文化会館(ABK)竣工
1970.10	AOTSより富永佳志さん(バンコク駐在員として兼任)
1971.05	AOTS 穂積理事長が訪タイ、『日・タイ協力事業』を推進することに
1972.07	JTECS 設立認可
1973.01	タイ国法人泰日経済技術振興協会(TPA)設立認可 ウー・チューリヤン財団ビル5階にて 事業に着手
1975.09	TPA 会館完成 事務所を移転
1985.07	TPA 別館開館
1988.01	TPA 付属技術研修センター(TPI)開館
2007.06	TNI 開学
2007.08	TNI 開学記念式典開催

会科学・学術・教育専攻大卒は約13.5%と約3倍となっています。つまりタイの大卒者は科学技術系の割合が少ないということです。大学を卒業しても就職できないという問題がまだ残っていますが、この問題を私たちの大学はどう解決するかということを考えています。これに関連して私たちの泰日工業大学(TNI)のことを少し紹介します。

TNIはアジア学生文化協会と関係の深い大学です。その歴史を見たら簡単にわかります。1957年にアジア学生文化協会(ASCA/ABK)が設立され、59年に海外技術者研修協会(AOTS)が設立されました。そして1970年、AOTSより職員の富永さんがバンコクの駐在員として派遣されてきて、その後すぐ穂積先生(ASCA並びにAOTSの初代理事長)がタイを訪問され、日本政府の推進する日タイ協力事業をはじめることになりました。1972年にTPAの日本側の窓口となる(社)日・タイ経済協力協会(JTECS)が設立され、翌年に泰日経済技術振興協会(TPA)がタイのバンコクに設立されました。そしてTPAの建物が現在のスクムビット通

①

TPAとTNIの創設貢献者

元財務大臣
ソンマイ・フントラクン氏日タイ経済協力協会 初代理事長
穂積五一氏

TPA は、タイと日本の協力により、タイ産業界の発展を支援する非営利団体として、1973年1月に設立されました

②

TPA発会式 (1973年5月24日)



(ケーチュリアン事務所)



りに完成したのが1975年。その後1998年にはTPA 附属技術研修センター (TPI) がバンコクのパッタナカンに完成し、大きくなったTPA 事業を分割しました。そして2007年に泰日工業大学 (TNI) が開学しました。ちょうど10年前になります。

この写真 (①) のお2人はタイのソンマイ・フントラクン先生と日本の穂積五一先生です。TPA および TNI 創設の貢献者です。最終的に二人の話し合いで、TPA をタイにつくることになったわけです。

TPA で最初に始めたのはいろいろな技術の講習会、日本語クラス、専門書の出版などでした。事業活動の中心はやはり日本からの技術移転ということで、タイ社会・企業が必要とする技術をはじめ、管理、経営等いろいろなセミナーを開催し、また企業の計測計器類の校正等、企業のニーズを調査・開拓して事業展開をしてきました。これ (②) が40数年前のTPAの発会時の写真です。次に、写真③の手前のビルが最初に建てたTPA本館です。後ろのビル、別館は10年後に増築したものです。そして、さらに1998年には、

別の場所、パッタナカーンに新館を建設しました。

TPA はタイの工業化を支えてきた自負を持っています。日系企業の増加、タイの工業化の進展とともに会員の数も増え、企業の技術者の訓練、新しい技術の移転、中間管理職の研修等、様々なコースを立ち上げ、研修コースの数も増大して行きました。また、タイ人には日本語講座を、在タイ日本人にはタイ語講座も行ってきました。また技術関連書籍の出版、さらには工業計測機器の検定・校正サービス、通信教育、最近では、中小企業 (SME) 向けに様々なサービス事業も行っています。

TPA には現在、3,000 人ほどの正会員がいます。正会員は、日本留学・研修経験者です。正会員以外は準会員で、8,000 人ほどいます。また、企業会員が4,000 社ほどあり、この4,000 社が私たちのサービス事業と関係の深い会社ということになります。

そして、10 年前に設立した TNI は小さな大学です。しかし small, but beautiful です。学部は工学部、情報技術学部、経営学部の3つしかありませんが、学科は全部で15学科

③

TPAとTNI (主な施設)



④

TNIの学部課程

- 工学部 Faculty of Engineering
 - 自動車工学 (AE)
 - 生産工学 (PE)
 - コンピュータ工学 (CE)
 - 産業工学 (IE)
 - 電気工学 (EE)
 - 創造的マーケティング学 (CM)
 - ロジスティクス・サプライチェーン管理学 (LM)
 - 情報技術学部 Faculty of Information Technology
 - 情報技術学 (IT)
 - マルチメディア技術学 (MT)
 - ビジネス情報技術学 (BI)
 - 経営学部 Faculty of Business Administration
 - 工業経営学 (IM)
 - 日本語・経営学 (BJ)
 - 国際経営学 (IB)
 - 会計学 (AC)
 - 日本の人事管理学 (HR)
- 国際プログラム(2018〜)
【タイ・日本・アセアン・世界各国対象に英語で実施します】
- 工学部
 - デジタル工学 DGE (Digital Engineering)
 - 情報技術学部
 - データサイエンス・解析学 DSA (Data Science and Analytics)
 - 経営学部
 - 国際経営学 IBM (International management)

ほどあります (④)。特色は、自動車工学を教えていることです。タイの他の大学ではまだ自動車工学は教えていません。このことにより特に日系企業を、それだけでなくタイ及び欧米なども含めた全ての自動車工業界をサポートする人材を準備しようということががんばっています。IT 学部は将来を見据え、情報技術 (IT)、人工知能 (AI) といったものも教えています。経営学部もアメリカのような MBA、BBA という形ではなくて、日本的な工場管理とか、現場向きの経営学を学んでもらっています。こうして今年 10 周年を迎えました。

TNI が他の大学とどのように違うかというと、我々は TNI を日本のものづくりスタイルの大学と言っています。一般にタイの大学は理工系学部がある大学は総合大学となっています。TNI は、小さいけれど、特殊な技術、特殊な専門性を学ぶ大学であり、企業や産業界のニーズを捉え、教え方も理論と実験だけではなく、科学、技術、スキルを統合させて磨くという特殊なやりかたです。よその大学は講義主体の学習ですが、我々は課題

解決型の学習を行っています。

就職についても企業と密接に連携し、その企業が求める学生を推薦しています。TNI の卒業生は就職を 100% 保証しています。これは大学の一つの魅力となっています。学生数は最初 443 名でスタートしましたが、2016 年には 4,476 名を抱える大学になっています。

大学では 4 年生の前半に約 4 ヶ月のインターンシップがあり、現場で働く経験ができるシステムになっています。自分の専攻分野に関連する企業に行って、実際の労働を体験してもらいます。これはその後の就職のチャンスにも繋がっています。インターンシップ制度により会社と学生、お互いがそれぞれをよく知ることができるとうことで、結果として 7 割くらいの人が研修を受けた企業に就職しています。

また、TNI の特色としては日本の企業文化を教える、日本方式のものづくり教育を行うということです。すなわち TNI の 6 つの中核価値: KM-HR-HoP を教えます。K は Kaizen・改善、M は Monodzukuri・ものづくりの理想、H は Hansei・反省、R は

⑤

TNI キャンパス



⑥

創立貢献者としてTNIの中庭に建立

(2012年7月)



Respect・自他の尊重、Ho は Honest・誠実、P は Public Interest Conscious・公益意識です。こうした努力で、企業の学生に対する評判は大変よく、私たちの自慢になっています。

もう一つの特徴は、授業はタイ語で行っていますが、必須科目として日本語と英語を教えることです。ですから全ての学生は卒業時には一定の日本語ができます。大学の企業実習で日系企業の現場に行っても、日本人の上司と簡単な日本語で会話が出来ると言うことがポイントになっています。

一方設立から10年の間に、日本の大学60校ほどとMOU(覚書)を結び教育・研究協力ができました。学生の交換・交流や先生の交換・研修・共同研究などいろいろな面での協力を行っています。

現在のキャンパスは狭いところで建物は今A棟、B棟、C棟、D棟の4棟しかありません(⑤)。5つめのE棟はもともと一階建の食堂だった所を取り壊して現在6階の建物を建設中です。これが来年完成しますが、それでも最大約5,000人の学生しか入れないという規模です。

最後に、大学の中庭にはTNI創立の貢献

者として2人の銅像が立っています(⑥)。TPAの創設に深く関わったタイ人のソヌマイ先生と日本人の穂積先生の銅像です。これは何を意味するかというと、TNI創設に当って大学の一つの精神を伝えるためです。TPAを作った当初の精神をTNIも引き継ぎ、関係者が、特に若い学生たちがそれを引き継ぎ、忘れないようにがんばってもらうためのモニュメントとなればと思って作ったものです。

それでは、将来何をやりたいかという話は後ほどにまわし、とりあえずはここで閉めさせていただきます。

符： どうもありがとうございます。スポン先生のお話を聞くと、やはりアジア学生文化協会の創設者穂積先生の下で、同じ文京区にある新星学寮からアジア文化会館が生まれ、また、蒼生寮も文京区にあったということを思い出しました。今まで、1万以上の人たちがこの協会と関係があるというのは間違いありません。日本の留学政策なんですが、私が留学した時は1980年ですが、当時の中曽根康弘政権は留学生の10

万人受入政策を打ち出しました。福田康夫政権の時には30万人となりました。もちろんその中では隣の中国から来た留学生が一番多いということです。今日のゲストで、私と同じ世代で1982年に来日した呂新一さんにお話ををお願いします。

人材とは何か

人材になるために必要なことは

呂： 今日はお忙しい中、みなさんにはわざわざ足を運んでいただきましてありがとうございます。実は今回の計画を立てた布施さんからは、私に3つのことについて話してくださいと言われました。一つ目は人材、二つ目は私は中国人ですので、日中関係をどう見るか、三つ目は私は金融業界でそろそろ30年仕事をしていますので、世界経済はどうなるのかという、この3つのことを振られました。今はまず一つ目についてお話しし、時間があって次のチャンスが巡ってくれば日中関係について説明したいと思います。

人材ということについて、これについて3つの観点から見たいと思っています。一点目は人材というのは何を意味するのか。二点目は外国人が日本に来てどんな人材になるのか。日本人が海外に留学してどんな人材になるのか。三点目はもっと普遍的に今の社会で人材となるには何が必要かということです。この三点について私の考えを述べさせていただきます。

まず人材という言葉は非常に美しい言葉です。中国から来た言葉だと思いますが、人間

というのは意外に美しいもの、美しい言葉に弱いんですね。“我が社の人材”とか言われてですね。あそこの女性が美貌の持ち主であると、男性がころっとまいてしまうということです。

しかし、言葉に惑わされないことが一番大事です。というのは、人材と言うのは時代によって違うと思います。また立場によって全然違います。例えば、昔の時代ではソロバンができれば“人材”でした。中国だと李白みたいに優れた詩を書ければ人材ですね。あるいは字を書けるだけで一つの人材でしたが、今はコンピューターの字は人間が書く字よりもきれいです。昔は英語が喋れる、翻訳ができれば大事な人材でしたが、今はGoogleが自動翻訳をしてくれますから、通訳、翻訳の仕事を頼みに来なくなるでしょう。

また、立場によって人材も変わります。一番極端な例で言いますと、ナチスドイツがガス室でユダヤ人を殺した時には、そのためのガス室を発明した人、大量に一度に人を殺せる場所を作った人は、ナチスドイツにとっては人材です。しかし立派な戦争犯罪者です。その意味では、人材というのは立場によって全く変わってくるんです。

我々は自分がどういう人材になるのか。上司に褒められて、きみは会社のためによく頑張ったねと。実は会社の倫理、価値観はそのまま社会の価値観ではありません。あるいは真正面から衝突している可能性があります。その意味で、じゃあどういう人が人材であるのかと。私から見ると古今東西変わらない人材の定義は、私自身の勝手な定義ですが、志



呂新一 (Lu Xinyi) 氏

を持って、人間として温かみがある、要は機械的なものではない人間としての人材ですね。能力があって、他人のことを常に考えて、社会の平和と進歩に繋がる。周りに頼りにされると。こういった人は例えば日本政府から表彰状をもらってなくても、私から見ると立派な人材です。どこにいても尊敬される。

私個人の経験で言うと、香港ではわずかですが、日本でも、中国でも、アメリカでも、シンガポールでも働いたことがあります、どこに行っても変わらないです。職場で尊敬される人たちはどういう人かという、まず嘘をつかない人です。業績面で他人の手柄を自分の手柄にしたい人が多いですから。出世したいから、お金が欲しいから、だいたい失敗は他人のせいにして手柄は自分のものにします。しかしその逆をやっている人たちは尊敬を集めます。失敗したら、私のせいで失敗

しました、申し訳ないと。他人のためにがんばれる人、日々研鑽して自己の能力を高めて人、そして謙虚な人たちで、必ずしも会社の本部長とか、社長という人ではありません。

本部長や社長という人たちは組織では上に立っていますから、勘違いして自分が人材だと思いがちです。ただ、会社を離れればただの人です。サウナに行って裸になれば、この人が部長なのかとみんなが思うしまうわけで、皆と同じく単に骨に肉がついている生き物だけです(笑)。その意味で海外に行けば、あるいは自分の会社の外に出れば、ただの一人の人間ですから自分としてどういう価値観を持って自信を持てるかが重要になります。価値観と能力というのは自分の自信に繋がります。その意味では、真の人材というのはそれを持っている人ではないかと思っています。

ABK・アジア学生文化協会がどうしてこんなにそこで暮らした人たちや関係した人たちから愛されて、みんなにサポートされているのかというと、こういった人材を育ててきたこと、ABKを作った穂積先生がこういうことを目指していたから、みんなの共感と賛同を得て、例えば今日もみなさんにここに集って来ていただけるわけです。ただ金儲けの組織だったら、たぶんみなさんは来ていません。それでも来る人は、その人自身も金儲けだけを考えている人たちではないかと思っています。

二点目は、日本人が海外に行って人材になるか、あるいはアジアの人たちが日本に来てそのまま人材になるかということについてで

す。私から見ると、人間というのは皆なんらかの本質的なものを持っています。どこかに行ってそこで開花するということは、その人が本質的に持っているものが触発されて開花するということです。どこに行っても勉強したくない、楽だけしたいという人は、海外に行ってもまた海外で遊んで帰ってくるだけです。両親に私は留学して来ましたと言えるだけです。

しかし勉強したい人、感受性の豊かな人、感謝の気持ちを常に持っている人はどこに行ってもちゃんと目を開けて見えています。批判するだけではなくて、他人のどこが自分より優れているのか、自分がまだ知らないことがどこにあるのか、自分がその社会にどのように溶け込み、みなさんのために何が出来るのかということを常に考えますから、自然に成長します。だから、いろんな所に行って違う栄養を吸い取って大きくなれます。しかし栄養か毒素か分別できず、悪いものだけ吸い取る人もいます。アメリカに行ったら麻薬を吸って、ニュージーランド行ったらまた別の悪いことをして、シンガポールに行ったら立派なカジノがあるのでカジノで遊んでばかり。それでは留学してもますます堕落して行くだけです。その意味で、外に行くのはいいですが、必ず志を持って行くこと、留学で大事なのは楽をすることではなく、違う世界を経験して自分を鍛えるということです。

例えば日本について言うと、実は東南アジアにおいては日本のものは全てブランド品です。シンガポールでは、日本食レストランはだいたい日本よりは3割から5割ほど高いで

す。かなり儲けられるということで、日本のレストランは争ってシンガポールに進出します。日本品はみんなブランドです。そうすると、海外では日本人もブランドですね。そのブランド名に相応しい実を持つには何が必要かということ、やはり日本人としての誇りを持って、自国の文化をよく知ることです。例えば「詫び、寂び」とは何かと外国人に聞かれた時、説明できなかったらどうしますか。夏目漱石はどういう人ですか？ いや、わたしは知りません。高校で勉強していません。日本文化も理解していない。

さらに、日本人はどうして強いのかということ、根性があるからです。一つのことを一筋にそれをずっと研鑽する、磨き続ける。そうした日本人のいい所をもし忘れて海外に行って、ただバブに通って飲み明かすだけなら日本人としての価値もないし、普通の社会人としても、国際人としても磨かれないわけです。

あとよくあることは、アジアの人たちが日本に来て、日本を嫌いになって帰って行くということです。日本は閉鎖的な社会だとか、日本人は真面目すぎて要求が高すぎるとか。また、今の社会はインターネットが普及して、人と人の触れ合いが少なくなってきたり、お弁当がどこでも売っています。みんな会社の自分の机の上でひっそりとお昼を食べている。日本社会はつまらないなと感じる留学生もたくさんいます。日本の友達ができずに帰国する人も多いと思います。でも、それらのことは日本の一部ではあるけれど、日本の全てではないです。

そうしたことは、各人の目で見ていること

ですから、全てではないということをここに明記する必要があります。今の日本があるということは、要するに日本人の根性、日本人のたゆまぬ努力、日本人のセンス、勉強する精神、戦後アメリカから勉強をし、最近はいろんな国から勉強をしている。いろんな面があって、そして今日の日本があるということです。せっかく日本に勉強に来ているのですから、日本人のいいところを学んで自国に持ち帰る。そういったことがすごく大事だと思います。

三点目に今の社会で人材となるには何が必要かと言うことです。人材という言葉はちょっと大袈裟だと思っています。というのは、私は最低限の要求として、退屈ではない人生を送ること。例えば私が前に勤めていた会社の部長が恐れていたことは定年退職ですね。どうしてかと言うと、奥さんが怖い(笑)。こんな人生は惨めですね。何十年間働いてあとは毎日奥さんの顔を見るだけ。そんな生活から抜け出すには自分の趣味を持つこと、退屈しないこと。外に出かけることですね。毎日奥さんの顔を見なくてすむようにすればいいんです。そのためには目標を持つこと。目標を持つと、必ず見通しが立ちますから。例えば今から大分県の湯布院の温泉に行くという目標を決めたら、まずインターネットで調べます。どのように電車に乗ってバスに乗って行くかと。そうやって目標を立てると、やることも多くなり、死ぬまで退屈しませんよ。最後は年を取ると目標に向かって歩くスピードがどんどん落ちてきますけどね(笑)。それはしょうがないことです。そのように目

標を持つこと。そして感性を磨くこと。もう一つ、大事なことです。自分を持つことです。というのは、今はインターネットの社会で、いたるところに情報があります。他人の意見が溢れています。そうするとまた資本主義の力で、マスメディアは世界の隅々まで浸透していますから、今はテレビをつければ北朝鮮のことばかり。毎日聞かされると神経質でなくても神経質になっちゃうんですね。そういった社会に私たちは生活している以上、毎日情報の洪水が起きています。こうした情報は、ほとんど情報発信者のためだけなんです。彼らの給料のため。テレビ局からいくらもらうか、新聞社から原稿料をどれくらいもらうか。それだけです。私たちは、他人の意見を聞くだけのために存在するのではなく、自分の頭を持つことが大事だということです。

どうしてそれが大事かというと、一つの例を挙げますと、去年トランプさんがアメリカ大統領に当選したんですね。それを予測できた人はほとんどいなかった。ニューヨークタイムズ(New York Times)などの大手マスメディアを含めてです。また、イギリスがEUを離脱したこともほとんどの人が予測できなかったんです。それはみんながバカだからということではありません。たまたまその時に自分の頭を他人に貸していたということです。

私は金融機関にいまして、ヨーロッパからよくファンドマネージャーとか来て、金融機関の人に会います。イギリスの投票日の前にヨーロッパから来た金融機関の人たちは一様

にイギリスはEUから離脱しませんよと言っていました。というのは、イギリスがEUから離脱すると、ロンドンにある金融機関はEUでビジネスが出来なくなるからです。みなイギリスの免許を持っていますが、イギリスがEUの一員であると、イギリスの免許がそのままヨーロッパで使えます。離脱してしまうと免許が使えなくなってしまうので、金融機関の本部は全てパリかフランクフルトに移転する、という話ばかり彼らはします。だからイギリスはEUに残りますよと。

こういった話のどこが間違っているかという、金融機関の方たちは自分の利害に基づいて判断しています。普通のイギリスの庶民のことはまったく考えていません。アメリカも同じですね。グローバル化を提案しているニューヨークタイムズは、トランプは当選しないと、ただ電車に便乗してヒラリーという目標に向かって発車してしまったんですね。沿道で見た風景は、全部トランプが悪い、ヒラリーが正しいとなる。別に私はこの2人の誰が正しいとか誰が悪いとかを言いたいのではなく、要するに自分の頭で判断することはこれからの社会ではますます大事であるということをお願いわけです。情報が氾濫していますから、たぶん一番大事なことは情報を捨てることです。日本で最近流行った本で、『断捨離』という本があります。たぶん一番大事なことです。いらない情報を捨て、頭の負担を軽くすることですよ。その方がよほどみなさんの精神的な健康に役立つと思っています。

時間のチャンスがあればまた述べさせてい

たきます。

符： 呂さんありがとうございました。李先生、ヘン先生、スボン先生が留学生だったのは1950年代後半から60年代で、私と呂さんは1980年代です。留学生の歴史から見ると、その変化というのはもちろんあります。また、現在在学中の留学生たちもまた私たちと違っているわけです。そういう意味で、日本の留学生の受入れ態勢というのはすごく大事になりますので、その辺のお話を、ぜひ岡部先生から聞かせていただければと思います。よろしくお願いします。

日本留学の魅力と オンライン教育の可能性

岡部： 後になればなるほど喋るのが難しくなるというのがわかってきました。みなさん全然違う話をされてますので。まず、呂さんの話を伺っていてしみじみと感じたのは、私はこの3月でただの人間になりまして仕事は何もなくなったので、これからどうしようかという大問題を抱えています。結果として言うと、私は自分が今までいた放送大学の学生になりました。趣味を生かして、今まで好きだった合唱をどんどんやろうというので合唱部を作りました。今日の午前中もその練習でした。私は指揮もするものですから、皆さんを歌わせて、明日明後日は発表会で、それなりに楽しくはやっておりますが、本題に戻りたいと思います。

私は東大時代、工学部の先生をしてまし

て、何十人かの留学生を相手にいろいろな研究をやっておりました。やはり先ほどから話がありますように、だんだん留学生の「なぜ留学するのか」という気持ちも変わってきてますし、留学生のキャラクターもどんどん変化していますので、そういう立場から少し気になっていることがあります。まず、日本に留学することの魅力が、今、だんだん希薄になって行っているのではないかということを感じています。

なぜ日本に留学に来るんだろうという一つ目は、日本が技術的に、文化的に進んでいるということがあって、こういう時代には間違いなく留学生の方がたくさん日本に来たんだと思うんですね。それがだんだん日本が追いつかれ、追い抜かれつつありますので、そういう魅力が落ちてきているのではないかと思います。

二つ目は少し言い方が悪いかもしれませんが、日本に来て、日本で就職をして稼げるかという要因が二つ目の重要な来日の動機だと思います。が、これも少しずつ下ってきてまして、管理職の給与は日本は中国に抜かれたそうで、これもだんだん難しくなっています。

三つ目は、日本に学ぶべき文化的魅力があるかどうかということですね。例えば日本が持っている文化で外国人が魅力を感じるものがどれくらいあるかということですね。文化といってもいろいろありまして、古代からの文化もありますし、日本の持っているアニメキャラクターだとか、地域的な楽しさとかも含めて魅力があるかということですね。なん

となくこの3番目のファクターは良くなってきているかもしれませんが、平均として日本留学の全体的魅力は落ちてきているように感じています。

一方で、自分が日本と同じくらの発展レベルの国に遊びに行ったりとか、あるいは開発途上国などに行ってみると、そこに対してじゃあ私は魅力を感じないのかということそんなことはなくて、感じるからよく行くのですね。お互いに知らない地域に行ってみようという興味にはいろんな動機があって、例えば開発途上国に行ったら、そこには学校がないようだから作ってみたいと思う人もいるかもしれませんし、あそこに足りない技術をまだ補填できるなと思う人もいるかもしれません。そういう意味で、必ずしも学びに行くとか何かを獲得するというだけの動機ではなくて、与えるとか、そういう動機もあって、まだたぶん留学は続くんじゃないかと。かつてのような続き方はしないだろうけれど、続くのではないだろうかと考えています。

その場合、やはり他の国に行くには当然バリエーションがありますね。まず言葉が違います。それから文化や人の考え方も違います。そこをどうやって克服していくかということと、一つの大きな手段が留学ということになるのだと思います。で、これをもう少し簡単にできないかと思うのですが、一つの方法は先ほどスポンさんが紹介された TNI のように、ちゃんとした組織を作って、そこで例えば日本に行きたい学生さんを集めて、いろんな技術や文化を教えるというのが良い方法だと思います。しかしそれはそれなりにお金と力

がいますから、スポンさんのような方がいらっしゃるとか、周りに日本に理解のあるお金持ちがいないと成立しません。そういう方法もパラレルに考えていかないといけないと思います。

いろいろ見えますと、今、インターネットが非常に進展してます。私自身は東京大学が終わってから放送大学という通信制大学に就職しました。かつての通信制大学は郵送で教科書などを送って、先生とのやり取りも全部郵便で行っていたのですが、放送大学が出来た頃から「放送」というメディアを使ってやれないかということで、なかば実験的にテレビ、ラジオを使って教育の片側、先生から学生に対するコミュニケーションというのを放送を使って行うようになりました。ただ学生と先生の間はそれ以降も相変わらず郵便を使ってやっていましたが、ともかくもそういうモデルができたわけです。今、同じような大学が世界中にいくつかありますが、実はほとんどがインターネット化しています。

放送大学は、良くも悪くも日本政府が珍しく放送大学にはテレビのチャンネルを与えてくれたということもあり、一つのチャンネルをちゃんと持っているのですね。他の国の大学はそれほどちゃんとした権限をもらえなかったもので、みなさん苦勞されてきたのですが、最終的にインターネットが普及したことによって、他国はみな一気にインターネット化しました。放送大学はインターネット化には少し遅れましたが、文科省に3～4年前に許可されました。

最近インターネット教育が増えてきました



岡部 洋一氏

が、やってみてわかったのは、インターネットを過信してはいけないということです。先ほども言いましたように、インターネットは非常に良い面と非常に悪い面がありまして、マネージの仕方は難しいのですが、いいところを使えば、テレビ、ラジオ、あるいは郵便によって行われる通信教育に比べて物凄くコミュニケーション効率が高いので、かなり良質の遠隔講義ができるということがわかってきました。これをやはり先ほどの留学の話に少し結びつけたらいいのではないかという気がしています。

ただ、日本の文化や技術を勉強してみたいという人たちにインターネットだけで教育するのはやはり無理だろうと私は感じています。ベーシックな部分、例えば語学の非常に基本的なこと、あるいは日本の技術やマネージメントの仕方などの概観を伝えるにはイン

ターネットは極めて有効だと思います。そこでできるだけ、こうした手段を使って、やれるだけのことはやる。当然それだけでは不足ですから、今までのようにフルに4年間を日本に留学するのではなく、4年のうちの半分とか2/3くらいはインターネットでやってしまう。そうすると比較的負荷が少なく、国のバリアを超えることができるのではないかというのが、私が今感じていることです。

言うのは簡単ですが、実際にやろうと思うとけっこう難しいことがあると思います。私も放送大学で海外に住んでいる外国人にもこういうことが出来ないかとずいぶん考えたのですが、簡単ではないと。まず留学をする時はみなさん凄い決心をして来られるので、当然留学先の国の言葉、日本に来られる方は日本語を勉強するという覚悟をして来られるわけです。ところが海外にいる人にインターネットで教育して、日本語を勉強してもらい、日本語のこういう教育を聞けよと言ってもそう簡単ではないなという気がしまして、その辺の仕組みは考えないといけないのですが、こうした教育システムをきちんと考えてみる必要はあると思っています。

先ほどの繰り返しになりますが、インターネットがあるから何でもできるかという、必ずしもそうではなくて、やはり直接、ダイレクトに人に触れてみないとわからない部分、例えば日本人の考え方のベースには何があるのかというのを海外の人にわかってもらおうと思うと、インターネットだけではちょっと無理かなという気はしています。

でもインターネットでもけっこういけると

ころもあるんですね。SNS (Social Network System) という、Twitter とか Facebook と申し上げた方がいいと思いますが、今これで結婚にまでいくようなコミュニケーションをとっている人がけっこういるんですね。東京で働いている私の教え子が、ある時突然釧路に住んでいる人と結婚すると言い出して、私はまだその頃はそんなにインターネットの力を信じてなかったので、おまえ変なヤツをつかまえたんじゃないのかと言っていたのですが、結婚して非常にうまくいってます。ということもあり、私自身が放送大学の学長になってから、実際に Twitter とか Facebook を始めました。しょっちゅうやっている、だいたいそういうところに書き込んでくる人のキャラクターが見えてくるんですね。で、実際に本人に会ってみると違和感はほとんどないんです。あいつは SNS 上にはこんなことを書いているけど、本当に会ってみると全然違うタイプだねということは、まずあり得なくて、全部本音が出るんですね。そんなことで、けっこう人間の考え方とかコミュニケーションも、少なくとも言語が一致していればうまくとれる部分が多いと思っています。最後に結論を申し上げますと、これからは国のバリアのかなりの部分をインターネットを使って減らすことが出来るだろうというふうになんとか思っています。

然しながら、最後の最後の真の部分はやはり直接顔を合わせた方がいい。同じ釜の飯を食った連中の方がやはりコミュニケーションは良くなるというのも事実なので、その部分は今後とも、今の ABK のようなシステムと

か、そういうものがうまく働くことによって成立して行くのではないかなと、ややかっこいい締めにさせていただきまして、私の話を終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございます。

符： どうもありがとうございました。こういう短い時間の中で、それぞれの先生のしっかりしたお話が皆さんに伝わっているかどうか、私はモデレーターとして気になるところです。でも、アジア文化会館、新星学寮という場所は本日のパネラーの元留学生にとってはすごく大事な場所だと思います。なぜかという、今日のテーマは人材ですけど、人間の形成に関して、青春時代をそこで過ごしたということは、人生の中でとても重要なことだからです。それは基調講演をされた曹先生がおっしゃったように、また曹先生は今でもそのネットワークを、穂積先生が実践されていた人を育てる精神を引き継ぎ、将来のアジアのリーダーを育てる事業をはじめられています。そして、それはアジアの各地でまた人の関係が繋がってゆくものと思います。

留学生が日本から学ぶべきものと日本人の心構え

符： 時間が大変厳しくなっていますが、先生方に一人一言で、これからの留学生政策に何を期待するか、どこに向かって行って欲しいかということをお聞きしたいと思います。会場のみなさんにも留学生のお世話をしている方が多いと思いますので、ぜひ率直に、

かつ簡単にご自分の気持ちを教えていただければと思います。ではまず呂さんからお願いします。

呂： 私から見ると日本の留学生政策、そう言うと語弊があるかもしれませんが、国の政策がどうであれ、やはり留学生自身にかかっているところが大きいと思います。それはABKが求めることと逆になっているかも知れませんが、ABKは日本の民間組織として日本政府にいろいろしていただきたいと思うのですが、私は外国人ですので、日本政府に何かしてもらえとはまったく考えてなくて、どちらかというと、自分はどうして日本に来るのかということを考えます。日本はいろいろなところで非常に素晴らしいです。品質の面で、例えばアニメの発信力においてはジブリの宮崎監督のような人がいる。あるいは日本の小説、山崎豊子の『大地の子』など、日本の小説をいろいろ読んで、日本文化の素晴らしさを留学生はよくわかっています。

留学生のみなさんが、私も含めて本国の人たちと話しをする時に、一般論として日本を批判する、あるいは日本の経済の遅れ、中国の勢いに圧倒されたという話をするだけではなく、別の面から日本を見て、日本の隅々にある日本の商品について話すことがあります。例えば台所に入ればわかりますが、日本の台所用品は物凄いい。一個一個洗練していて使っても、使っても壊れない。私は中国に帰る時によく持ち帰るものは何かというと、100円ショップで、お金がないから、あるいはずる賢く言うとお金を節約したいか



ら何を買うかという、100円のあのキュウリの皮を剥くものを買うんです。それは30個、40個買っても、4,000円しかかかりません。そして40の家庭に配ります。皆さんが大事に8年、10年経っても使っていますよと、私は帰るたびに言われます。ああいった良質のスティールを、鉄砲に使うのではなく、ミサイルに使うのではなくて、家庭の主婦の手間を省く為に使う、とても素晴らしいことですね。その意味でも日本は正しい手本を示してくれています。100円でこんな素晴らしいものが買えますから。そういったことをみんな日本に来て感じて、自分たちの生活レベルを上げる、豊かに生活できるようになる。

もう一つの例を上げてみます。私の妹は中国の揚州に新しいマンションを買って住んでいます。私が帰国する時はだいたい妹のところに泊まりますが、そこでいつも私は夜、雨が降っているのかなと思うんです。でも実は降っていませんでした。そのマンションでは上層階の下水を流す管が壁の中を通っていますから、常に壁の中の水が流れているんですね。いつも大雨かなと思っていたら上にた

くさん階がありますから、そこから下水が落ちてくる音だったんです。立派な新しいマンションに住んでいながらいつもそんな心配をして、外に行く時には傘を持って行かないといけないかなと考えてしまう。そういった母国との違いを日本から勉強する。だから留学生自身が日本との違いをいろいろな目で見て感じて、自分たちの質

を高める。それぞれが一步、一步、小さいところから勉強していくこと。そのような考え方が広がるともっと多くの人が日本に留学に来るのではないかと考えています。以上です。

李：一言、と言われると難しいですね。例えば、人を10人呼んで一緒に飯を食うというのがあります。そういうことをする人は、多くないでしょう。しかし、友達を自分の家に呼んで一緒に飯を食う。そういうことをすることは、そんなに難しくはないでしょう。

今、日本の人口で65歳以上の人が相当多いですね。65歳は必ずしも老人ではないわけ、日本語を教えられる方もたくさんいると思うんです。外国人留学生に日本語を教える。そして、彼らをたまにはピクニックに連れて行く。時には、うちに遊びに来ないかということで、ラブコールをかける。

私が韓国を離れたのは1965年です。当時の韓国は、ものすごく貧しい時代でした。今の韓国は豊かになってきました。韓国だけでなく、アジアの台湾、香港、タイ、インドネシア、マレーシアもとても豊かになっ

てきました。ベトナムも、今は相当豊かになってきたのではないのでしょうか。

私たちの世代が考え、体験したあの時代と、今は相当の差があるということです。日本に来る留学生も、「贅沢な暮らし」をしているのかもしれませんが。どういう風に我々がアプローチしていいのか、です。

しかし、できるだけ自分の家に呼んで一緒にご飯を食べる、あるいは留学生の学校に65歳以上のみなさんも講師として行って教えるということです。

または、日本を離れて、アジアの国を旅することはどうでしょうか。国が、今はどうなっているのか。それをやはり知る必要があると思います。その上で、日本に来る留学生にどう接して行くのか。彼らに対して我々は何ができるのか。そういうことを考える。そして、何かできないだろうかということを模索する以外にないのではないだろうか、と思います。

政府のやることに、私たちはあまり期待することはないと思います。政府の仕事は、それなりに物凄く大事なことであり、それはそれで良いと思います。私は、われわれは、何が出来なのか、ということを探したりしてみたいと思っています。

ヘン： 私の望み、あるいは希望、お願いと言った方がいいですかね。日本の社会、日本のみなさん、しいては日本政府、あるいは留学生と関係している様々な団体に対して、私は留学生一人一人を独立した人格を持っている人間として認識して、決して彼らが政治的取引の道具にならないようにお願いしたいと

いうのが一つ。

二つ目は、大学あるいはいろいろな留学生と係わりを持っている関係先に、外国人学生と日本人学生の区別をなるべくしないようお願いしたい。それから、国費留学生と私費留学生の区別をあまりきつくないで下さいということです。以上です。

スポン： 日本留学の話題はもちろんなのですが、先ほどの話の続きである私たちがこれから何をやりたいかということを少し説明させてください。まず第1に来年度から国際プログラムを始めます。これはアセアン、また隣国の CLMV；カンボジア、ラオス、ミャンマー、ベトナムの方々が日本のものづくりスタイルを勉強できるように、英語で教育します。これに関連して日本の大学の先生との交流活動も同時にやっていきます。

第2は学生の募集ですね。資質の高い人を募集したいので、少し奨学金制度を改善したいと思っています。第3は、語学です。これはコミュニケーション上、大事なことからより有効に改善して行きたい。第4は、産業界との協力です。タイ日産業人材の育成という部分においてイニシアチブを発揮したいと思っています。

第5は、教員の質の向上です。日本留学に関係しますが、学内の教員養成手段として、日本の大学院の博士課程、修士課程に進学させ、日本のものづくり、本物のものづくりをさらに深く勉強してもらいたいと思っています。

第6は、今後は、日本の大学と協力して協

同研究、開発などの取組みと産業サービスの活動を行いたいと思っています。

第7は、最初に話したタイの人材育成のシステムで大きな問題が残っている部分について、大学卒業者の数は増えましたが、理科系と文科系の割合は3:7です。この割合だとタイの産業発展はうまくいかないと思っています。また大学を卒業しても就職できない学生もいます。最近、タイ政府もこの“人づくりは国造り”ということを理解して、STEM: Science、Technology、Engineering、Mathematics（科学、技術、工学、数学）の教育は難しく勉強は大変ですが、中学・高等学校でもっと力を入れて、この分野を専攻する学生が増えるような方針を立てています。そして今の理系3、文系7という割合をこの10年以内に5:5まで持って行きたい。またはさらに6:4、7:3という程度になれば、なんとか国の発展の力になるのではないかと考えます。

我々は小さな大学ですから、もっともっと改善しなければならないと思いますが、今でもタイの一つの理工系特殊専門大学のモデルのようになっています。最近国会議員や、高等教育機関、又は他の私立大学などがよく見学に来ています。ですから、今後いろんな協力事業が出てくるのではないかと考えています。そういうことで、さらに、日本の大学には今後も協力事業でお願いすることがたくさんあります。ぜひよろしくお願いいたします。

岡部: 私は特にありませんが、日本にまだ魅力があるということがわかってきたという

ことだけが、今日の最大の成果だと思います。そして、せっかく日本に来ていただいた外国人の方が嫌な気分で帰られないように、外国人ハラスメントを無くしたいという方向で我々日本側は努力するべきではないかというのを結論にさせていただきたいと思います。

＜質疑応答＞

（質問者） 日本ではバブルがはじけて、経済はこの20年間全く成長しないという中で生まれ、学生生活をしてきている人たちがだんだんとこれから社会人になっていきます。この人たちはなぜ海外に行かなきゃならないのか、なぜ英語もタイ語も話せないのに海外に行くのかと、リスクをとらなくなってしまっているんですね。彼らは社会に出てもやはりリスクをとらないわけで、これは非常にいかなものかと思っているのですが、先生方はどのような見方をされているのでしょうか。

符: 時間の関係でそれぞれの先生にお話を伺うと長くなりますので、私の方で答えいただく先生をお願いしたいと思います。曹先生は今中国などに日本の学生たちを受入れたというお気持ちが強くなり、そういった事業を一生懸命おやりになっていらっしゃると思いますので、この質問にはぜひ曹先生にお答えいただきたいと思います。

曹: 今の日本の学生の事情は決して日本だけではなくて、中国でも同じです。やはり留学してどういうメリットが出てくるか、とい



うことが問題になっているのではないかと思います。特に中国では国内マーケットがどんどん重要になって、学者になるのなら別ですけど、一般就職のためには海外留学をしても、じゃあメリットがあるのかという大変疑問が出てきます。日本の場合も同じです。我々がこういった奨学金のスキームを作った時も相当期待はしていました。しかし特に日本の場合は、海外留学して国に帰ったら就職が問題になります。これは他の国でも同じですが、日本ほど難しくないわけです。早稲田、東大に行った方が就職しやすいわけです。そういう点で、よほど海外に興味がある人以外、留学というのは難しくなると思います。昔、我々の時代だったら海外に行くとなると家族、親戚が、また会社ごと空港に行って「万歳！万歳！」と言っていたわけですが、その頃とは違います。そういう意味で、そう簡単に解決できる問題ではないと思います。

まあそうは言いますが、我々のプログラムに入ってくる日本の学生にも相当立派な学生がいます。それから大変国際的な視野を持ってやっている方も決して少なくありません。

符： 曹先生、ありがとうございます。ヘン先生からも一言あるそうなので、どうぞ。

ヘン： 1950年、1960年代、日本に一冊のベストセラーが出ました。小田実の『何でもみてやろう』という本です。私は誰かにその続きを書いて欲しい。『続・何でも見てやろう』という本を今書いてください。これは一つの提案です。

布施： それでは予定の4時半を過ぎましたので、これでアジア学生文化協会創立60周年記念シンポジウム「アジアの人材育成と日本留学の課題」を終了させていただきます。ご静聴ありがとうございました。

時間の制約で、パネラーの皆さまのお話を十分伺うことができず少々残念ではありますが、それでも心に刻まれた話がたくさんあったのではないかと思います。会場の皆様にはぜひパネラーの皆さまの発言から何かを汲みとっていただき、考える機会にさせていただけたらと思っております。

今後ともどうぞ私どもの財団のご支援をよろしくお願い致します。

最後になりましたが、シンポジウムの協賛を頂きました公益財団法人東芝国際交流財団様に改めて御礼申し上げます。

ご来場のみなさまどうもありがとうございました。もう一度パネラーの皆様には拍手をお願いいたします。

(終)

(公財) アジア学生文化協会 創立 60 周年記念式典

主催者・来賓あいさつ

2017年9月15日(金) 17:00～ 文京シビックセンター スカイホール



公益財団法人アジア学生文化協会 創立 60 周年

記念式典・懇親会

式次第

式典 17:00～17:40

- ・開会 白石勝己 事務局長
- ・ご挨拶 小木曾友 理事長挨拶
- ・事業報告 佃吉一 常務理事
- ・御祝辞 成澤廣修 文京区長
柴山信也 海外産業人材育成協会 (AOTS) 理事長
スポン・チャユサハキット 泰日工業大学 (TNI) 理事長

懇親会 17:40～19:00

- ・乾杯 岡部洋一 前放送大学長・東京大学名誉教授
- 一懇談会 (* ABK 日本語校生 ビデオ作品上映)
- ・シンポジウム登壇者ご紹介 布施常務理事
- ・メッセージ 杉浦正健先生 元法務大臣 (小木曾理事長代読)
- ・祝電紹介
- ・来賓の一言 川上剛さん (元 ABK 在館生。2000 年～ILO パンコク、ジュネーブ本部勤務後、現在インド駐在。)
符祝慧さん (元 ABK 在館生、新星学寮在寮。Singapore「聯合早報」東京特派員。): 新星学寮建替えについて
- ・中締め ABK 学生フロア会長…張笑 (中国、東京大学社会情報学府博士課程)、バドゥナサン・ガンバドゥラハ (モンゴル、東京大学工学部建築学科)
- ・閉会 白石勝己 事務局長

小木曾 友

(公財) アジア学生文化協会 理事長

アジア学生文化協会設立 60 周年記念に当たりご挨拶申し上げます。

まず、海外からこの記念式典のために遠路はるばるご来日されましたご来賓の皆様、また、文京区長成澤廣修様はじめ、これまで長年にわたり ABK のために物心両面の厚いご支援の手をさしのべて下さった内外の関係者の皆様、本日は公益財団法人アジア学生文化協会 (ASCA、ABK) の 60 周年記念式典にご臨席を賜り真に有難うございました。

当協会は 1957 年 9 月 17 日、穂積五一先生によって設立されました。1959 年には海外技術者研修協会 (AOTS) が設立され、1960 年、AOTS とアジア学生文化協会とのコラボレーションによって、アジア文化会館 (ABK) が建設され、日本の大学で勉強するアジアの留学生と企業で技術を勉強する研修生、そして日本人の学生と職員が共同生

活を営むミニ国際社会がこの日本に実現することになったわけです。その後の ABK の活動の歴史は皆様よくご存知の通りです。

1982 年 AOTS が北千住に移った後、1983 年 ABK は留学生日本語コースを開設し、大学や専門学校に進学するための留学生の日本語教育に邁進し今日に至るまで優に 1 万人を越える卒業生を生み出してきました。一方、ABK と AOTS で勉強した留学生、技術研修生たちは帰国後各地で同窓会活動を展開し自己実現と社会の向上のために献身的な努力を積み重ねています。その象徴的な成果として、タイにおける TPA（泰日経済技術振興協会）・TNI（泰日工業大学）の設立が挙げられると思います。

ABK は、公益財団法人アジア学生文化協会、学校法人 ABK 学館の二つを両輪とし、今後ますます数の増大が予想される多様な目的の来日留学生の日本語教育、生活・勉学・就職などの支援、日本人との共同生活の場の質的充実、大学との教育交流の拡大、全体として少子高齢化の進む日本社会が留学生にどう対応すればいいのか、などの課題と取り組みながら、母国の未来を担い、国際社会で活躍できる人材の育成をはかり、ヒューマンネットワークの輪を広げ、戦争のないアジアと世界平和の実現のために微力を尽くしたいと考えております。

海外では、活発な活動を繰り広げているタ

イの TPA・TNI、ベトナムのドンズー日本語学校、インドのタミールナド同窓会センター、香港の百賢アジア研究院などとの連携を深め、また世界各地・各界で活躍している同窓生の皆様、国内では、ABK とは創立以来の親密な関係にある AOTS、JTECS はじめ留学生友好団体、大学・専門学校・日本語学校などの教育界、留学生に就職やアルバイトの機会を提供していただく大小の企業、またさまざまな施策によって留学生・研修生の

生活・勉学環境の改善に努力をいただいている自治体・官公庁など、長年にわたりご支援・ご指導をいただいている各界各層の一層のご協力・ご鞭撻を賜りながら、また次の 50 年、100 年に向けての歩みを踏み出したいと存じます。

また、ABK の今後の最大の課題は老朽化した建

物の建て替えです。2013 年に建物の一部は ABK 学館の校舎として耐震化を果たしました。残りの建物の建て替えも東京直下地震がかなりの確率でやってくるといわれているので、なるべく早く実現しなければならないのですが、大きな資金が必要です。そこで、資金の目途がある程度付きやすい ABK 学館の校舎を増築することを優先し、さらに、ABK の原点であるアジア留学生と日本人学生が同じ屋根の下で生活し人間を磨き合う共同生活寮の建て替かえもぜひ地震がやってく



る前に実現したいと願っています。そして、その先駆けとして、ABK 誕生の母体となった新星学寮の建て替えに着手しております。これは新星学寮に住んだ元留学生の寮友たちの間に、この伝統ある自治寮がこれからのアジアの中の日本にとってなくてはならないものであるとの声が澎湃として沸き起こり、3 年来の検討が続けられてきました。

ABK が取り組むこうした課題は大きな困難を伴うものですが、内外各界各層の知恵と力をお借りして、ぜひとも実現したいと願っています。ぜひ関係者の皆様の絶大なご支援ご叱咤をお願い申し上げる次第です。

最後に、この 60 年間、ABK が思う存分活動する場を提供して下さいました文京区に深甚なる謝意を表します。歴史と学術文化の薫り高いこの文京区にあってこそ ABK の今日がある、と確信いたします。今日、お帰りの際にお持ちいただきますお土産は、本郷に 380 年続く壺屋の壺最中を用意させていただきました。この最中は、幕末に江戸を無血開城に導き戦火から救った立役者の一人である勝海舟が愛好したと言われている名菓です。どうかご賞味くださるようお願い申し上げます。

これをもちまして私のご挨拶とさせていただきます。ご静聴有難うございました。

成澤 廣修 東京都文京区長

みなさんこんにちは。ご紹介いただきました文京区長の成澤でございます。アジア学生

文化協会の創立 60 周年、まことにおめでとうございます。小木曾理事長はじめとする役員の皆様方のなみなみならぬご努力の結果と、心より敬意を表する次第でございます。また冒頭には理事長から過分なお言葉を頂戴いたしまして、心より感謝を申し上げたいと存じます。

またわたくし、壺屋と同じ町内会でございます。壺屋の社長に成り代わって御礼申し上げます。余談ですが、勝海舟が通っていた頃の壺屋というのは今の本郷三丁目のあたりではなくて、今ちょうど東洋大学がある辺り、白山下辺りで、壺屋のお店があった所は白山通りになっている辺りと言われています。あくまでも余談でございます。

アジア学生文化協会の創立 50 周年の時には、今日シンポジウムをやっていただいた同じ小ホールで文京区と共催でシンポジウムを開催いただき、また 50 周年式典でも私は祝辞を述べさせていただきます。恒常理事には私ども文京区の国際交流フェスタの実行委員会のメンバーとして、そして今日、荒井理事長ほか多くの理事のみなさんもお見えのようですけれど、布施常務理事には同じ区内にありますが日中友好会館の理事、私は評議員として、日頃からも大変お世話になっている関係でございます。

10 年前の 50 周年の時には実は文京区の人口の中にはいわゆる外国人人口というのは入っておりませんでした。外国人登録制度だったからです。で、この 10 年の間に住民基本台帳法の改正があって、文京区の住民基本台帳の中に外国人人口が含まれる

ことになりました。つまりアジア文化会館に住んでいる、そして新星学寮に住んでいる、富士前の女子寮に住んでいる、この3つの寮に住んでいる留学生たちは、今は文京区民であります。つまり、先ほど理事長におっしゃっていただいたように、私たちは同じ文京区民として、これらの留学生のみなさんたちが、この地で安全に、安心して、健やかに勉学に励んでいただけるように、お支えをする役目を自治体は担っております。

これからも ABK のみなさんたちに様々なお願いをすることもあるしお願いをされることもあるかもしれませんが、お互いの協力関係の中で円滑な運営に少しでも協力をしていきたいなあと考えております。

今日このシビックセンターに入る時に気付かれた方もいるかもしれませんが、私どもの自治体の庁舎には日の丸と文京区の区旗の他に国連旗が掛かっております。今、日本の自治体は1,741 ありますが、このうち国連旗がかかっているのは、この文京区の建物だけでございます。なぜかというと、この建物の一階には女性のエンパワーメントと男女共同参画に関する国連機関であります ULWomen の日本事務所が入っているからです。

多くの大学がこの地にあるのもみなさん

ご存知の通りです。今や都心回帰で19にまで区内には大学が増えました。それだけに多くの海外からの留学生のみなさんたちも受入れています。東京大学ではかつての目白台の東大分院跡地に850室を超える規模の一大学生寮を造る計画があるとも聞いております。

これから多くの留学生にとって学びの地であると同時に、住んでいる、居住の地としても私どもは役割を果たして参りたいと存じます。ABK が現地建替えをしていた

だけということ、大変ありがたいなと思います。実は文京区はいろいろな県の学生寮も数多くあります。「あります」というか、「ありました」にだんだんなろうとしています。いくつかの学生寮は区内の同じ場所で建替えをしていただいています。文京区にあった土地を売って埼玉に行くと、

売ったお金で新しい土地が買えて、建築費まで出てお釣りが来るそうです。そうやってどんどん今学生寮が外に出ていってしまっています。あ、それを勧めているのではありませんよ（笑）。ぜひ現地建替えをしていただいて、これからも末長くお付合いをいただければと思います。

60周年心よりお喜び申し上げて、ご挨拶とさせていただきます。おめでとうございます。



栗山 信也**(一財) 海外産業人材育成協会 理事長**

この度はアジア学生文化協会（ABK）の創立60周年、大変おめでとうございます。小木曾理事長以下職員の皆さん、更にはここにご出席のOBの方々を含めた関係者の方々のご努力の賜物だと思いますので、心からお祝いを申し上げたいと思います。

AOTS（現海外産業人材育成協会、旧海外技術者研修協会）とアジア文化会館との関係は切っても切れない関係であることは小木曾理事長のお話にも出ておりますが、若干ご説明させていただきます。私自身は去年理事長になったばかりの新参者ですので、昔からの関係者がたくさんご出席されている中でこういうお話をするのは恐縮ですが。

1954年という私が生まれた年なのですが、丁度その頃に国費留学の招聘が始まりアジアからの学生が集まり、日本とアジアと共に発展していこうという機運が生まれ、そして徐々に増えてきた留学生の宿舎の問題が出てきて、ABKの構想が出てきたと聞いています。それとほぼ時を同じくして、2歳AOTSのほうが年が若いのですが、双子の兄弟の弟と言ってもいいぐらいほぼ同じ時期に、AOTSの構想が起こってきています。

つまり、これから日本企業が海外にどん

どん輸出や投資をしていくということになるわけですが、当時の日本の産業界、特に日本機械連合会が、現地の担い手の人材育成を我々もやっていかなければいけない、そして技術協力を伴うような輸出振興でなければならないということを提言しました。そして当時の通商産業省（現経済産業省）も、政策としてそういう産業界を支援することを打ち出しました。

それでご承知のように、穂積五一先生が

留学生会館を作ろうという話がありました。留学生会館を作るのは当時も大変なことで、これには産業界の人材育成のニーズも取り込んで、国の政策とも合わせ、一緒にやっていくのがいいのではないかという話になり、そうした会館の建設の提言が行われると同時にAOTSが設立され



ています。そうして新しい会館、アジア文化会館が完成すると同時にAOTSはそこに事務局を置くことになります。穂積五一先生がAOTS並びにアジア学生文化協会の理事長となられ一心同体で事務局を運営しながら、会館のかなりの部分をAOTSが技術研修生の為に使うことになりました。研修生はアジア、アフリカ、ラテンアメリカ等の現地の日系企業から学びに来る人たちで、留学生と同じ建物に同居するという、たいへん有機的な会館ができたということであ

ります。

輸出振興という商売色が強いような感じがするのですが、穂積五一先生が両方の団体の理事長でありましたから、経済とか技術とか経営管理とかを学びながらも、やはり底流にある精神は「共に生きる」、「共に発展する」、すなわち「日本だけに都合のいいことをやっていくんじゃないんだ、アジアの為に、みんなの為にやっていくんだ、それが日本のためになるんだ」という穂積精神が底流にあって、職員のみなさんもそれを一生懸命心に刻んで、実践していこうということで始まったと理解しています。それがAOTSの初期の頃であり、アジア学生文化協会ともども同じ精神で設立・運営されたということです。

それから1982年になりますと、会館のキャパシティ等の問題もありまして、AOTSは北千住に新しい会館を作り移転しました。しかし、引き続き穂積精神のもとで活動する兄弟団体として、日本語教育をはじめ、いろいろな関係で協力をさせていただいています。

先ほどのタイのスポンさんがお話をされていましたが、ある意味では彼はABKとAOTSを体現したような人です。スポンさんは、東京大学大学院の時にアジア文化会館の在館生であり、また、卒業後の1968年にAOTSの研修生として日本の企業で技術研修を受けられ、その後、1984年には再来日して管理研修にも参加されておられます。そして泰日経済技術振興協会（TPA）（日・タイ経済協力協会（JTECS）が日本側の窓口になっています）、また先月設立10

周年記念のイベントを行った泰日工業大学（TNI）の創立と推進の立役者になられましたが、彼はABKとAOTS二つの団体の誇るべき方であると思っています。

AOTSという略称ですが、5年前にAOTSとJODC（海外貿易開発協会）という二つの団体が合併し、HIDAという略称になりました。それで5年経過しましたが、その前の50数年間のAOTSの歴史、スポンさんたちをはじめとする元研修生たちの影響力が非常に大きく、世界中に散らばっておりますから、せっかくあるAOTSのネームバリューをもう一度使おうということになりました。正確な英語訳にすると無理がありますが、みんなで知恵を絞りまして、もう一度AOTSという略称になるようにいたしました。改めまして新生AOTSということで、これからよろしく願いたいと思います。

ただ、今は非常に課題もありまして、日本の有名企業も昔のままでありません。どんどん変わっていかないと生きていけないという時代になってきているわけです。我々も従来型の経営管理の研修はまだまだ必要ですけども、それに加えてITなどの新しい技術や新しい経営管理の手法などを加えながら進化し、研修生と共に学ぶ姿勢でやっていかないと、これからの50年、60年は生きていけないのではないかと考えております。引き続きABKさんとも手を携えながら、この先の100周年に向けてがんばっていきたいと思いますので、ぜひご指導いただきたいと思います。ありがとうございました。

スポン・チャユツァハキット (Supong Chayutsahakij)

泰日工業大学 理事長

みなさんこんにちは。ただいまご紹介いたしました泰日工業大学（TNI）理事長のスポンです。最初に小木曾理事長はじめ、アジア学生文化協会の職員、関係者の皆様に心より創立60周年のお祝いを申し上げます。

私は、昭和36年（1961年）に日本政府の文部省奨学生として来日しました。最初に千葉大学の留学生課程で日本語と教養課程の勉強をしてから、東京大学工学部の電気工学科に編入しました。

最初の二年半は千葉大学の留学生会館に、そして東大に入ってから次の二年半は駒場の留学生会館に入って通学していました。その間に時々アジア文化会館（ABK）には遊びに行きました。ABKはよその留学生会館と比較するとユニークな雰囲気がありました。うまく説明しにくいのですが、温かくてたくさんの友人が作りやすいところでした。

また時々穂積先生のことも聞きました。当時先生が関わっていた留学生の問題や事件についての話を聞いて、先生は留学生のために父親のような立場で、いつもよく面倒を見てくださってる人だと思ってました。

私がABKへ本格的に入館したのは学部を卒業して大学院に進学する時点でした。1966年から1968年までの2年間だけでしたが、この2年間に、私は幸い穂積先生の話聞く機会がたくさんあり、先生の理想、考え方を大いに勉強しました。しかし、当時は学生でもあり、あまり深くは理解できなかった点もありましたが、先生が話されていることやなさっていることに多くの感銘を受けました。そして、この2年間にそ

こで学んだことは、私の人生に大きな影響を与えることになりました。

卒業して帰国してから、タイ日の合弁会社、テイジンポリエステルに勤めました。この会社はタイで初めての合成繊維の製造会社なので、会社も私たちががんばって軌道に乗せ、更に東南アジアで一番大きな合成繊維

メーカーに成長させました。私自身も会社の取締役になりました。

一方、私は様々な社会活動もやりました。特に元日本留学生の仲間や研修生の仲間たちとタイと日本の関係の活動をがんばってよくやりました。特に、ABK関係者の皆様もご存じのABK-AOTS同窓会の設立、TPA（泰日経済技術振興協会）の設立、さらにTNI（泰日工業大学）の設立などです。

この50年間、そうした活動をがんばっ



て継続してきましたが、考えてみると、こうした活動の原点はやはり ABK なんです。私は帰国後、何十回も日本に来ていますが、時間の都合がつけば必ず ABK を訪問しています。ABK は私のセカンドホームですから。このような ABK への思いや我々の気持ちを語ったらいくら時間があっても足りません。簡単ですがこのあたりで

終わらせていただきます。

ABK がこれまで同様アジア各国の人々の交流の中心となり、我々の第二の故郷としてあり続けることを確信し、また、新たな時代を切り開く新生 ABK としてますますご発展されることを祈念して、私の挨拶とさせていただきます。本日はおめでとうございます。

ABK 学生フロア会長あいさつ

張 笑 (ZHANG XIAO) ～中国

東京大学大学院学際情報学府社会情報学専攻（博士課程）

みなさんこんばんは。この4月から ABK フロア生（*）の会長を務めています中国の張笑です。私は今東京大学学際情報学府博士課程在学中です。アジア学生文化協会創立 60 周年おめでとうございます。この特別な時期に ABK にいられ、大変幸運に思っています。今日先生方の講演を聞いてとても感動し大変勉強させていただきました。先生たちは今でもアジア各国で留学生のために、世界のために、いろいろ考え、貢献し、0 から 1 まで奇跡を作り続けています。でも私たち若い留学生も自分がどうすればいいか考えないといけないと思います。

今の ABK には昔と変わらずにアジア各国からの留学生が共に暮らしています。フロア生は毎月花金会で料理を楽しみながら、コミュニケーションをとっています。春には新入生歓迎会、夏にはカラオケ大会、卓球大会、秋には秋祭り、冬には焼き肉忘年会など、1 年を通して楽しい思い出を

いっぱい作っています。

もちろん時代も変わっていて、留学生の生活もとても忙しく充実したも

のになっています。またネットが急速に発展し、みなさんはとても忙しいですけど、前よりもっと多くの可能性も生まれています。

今日先生たちのお話を聞いて、先生たちの時代のストーリーに感動し、それらの精神と志に大きく励まされました。先輩たちが奮闘して作った ABK、そしてこの世界は、私たち若い人が守るべきだし、新しい奇跡を生み出せればと思っています。ABK はいつまでもアジア各国の留学生の家、そしてアジア各国の友好の場です。ABK のこれからの繁栄をみなさんと力を合わせて作って行きましょう。どうもありがとうございます。



ガンバドラーク・バツナサン (GANBADRAKH BATNASAN) ～モンゴル

東京大学工学部建築学科3年

みなさんこんばんは。私はガンバと申します。今はABKの学生フロアの会長をしています。本日はABK在館生の大先輩の皆様はじめ大勢の皆様にご参加いただき、また今までABKを支えてくださった方々の話を聞けて大変嬉しく思っています。

アジアは世界で一番人口の多い地域であり、またアジアの多くの国々は発展途上国とされています。私もその発展途上国の一つであるモンゴルから参りました。私は、今は留学生ですが、自国の発展のサクセスやセールスの方法をいろいろ考えております。

前にこんな話を聞いたことがあります。「ある人に魚をあげればその人は1日食えることが出来ます。ある人に魚の釣り方を教えてあげればその人は一生食えることが出来ます。」。

先進国の発展途上国に対する支援や援助などは、この例えで言うと、「魚をあげる」ことに相当すると思います。そして先進国が発展途上国に最上級の教育を与えるとすることはどういうことかという、この例えの「人に魚の釣り方を教える」ことと同じだと思っています。

ですから最上級の教育を受けた留学生人材というのは、発展途上国の発展に一番大きな影響を与える人たちになれると思います。そのような教育を受けられる国はアジ

アには数少なく、その一つは間違いなく日本なんです。そしてそういう日本と自分の国を發展させたいと思う気持ち、志を持って



いる留学生たちを支えてくれる、その架橋となる場がABKだと私は思っております。そして、ABKは今年60周年を迎えました。普通の組織だったら50年生き続けることも稀なことだとみなさんご存知だと思います。ABKが60年生き続けたと言うことは、ここにいらっしゃる皆様方と、ここにいないABKの歴史に携わった何万人の方々のおかげだと私は思っております。そしてこれから先ABKが何十年生き続けることが出来るかどうかを決めるのは、ここにいる私たちをはじめとしたABKに関係する学生たち、そしてABKを支える人たちの役割といいますか、任務だと思っています。

今日に至るまで、何万人もの留学生の明るい道を導いたABKは、これからももっと明るく輝いていって欲しいと私は思っています。最後に、創立60周年おめでとうございます。

* ABKフロア学生…大学生の特別枠として募集され、審査委員（学生と職員で構成）の面接により選考され入寮する寮生で、ABKフロア規約に則り自治的共同生活の場としてフロアの運営を行い、ABK在館生全体の活性化（相互理解、交流等）に努めている。



奨学金情報

※ 奨学金情報は Japan Study Support のホームページよりご覧いただけます (<http://www.jpss.jp/ja/>)

岩谷国際留学生奨学助成

●対象：応募者は、学業成績が優秀であって、留学生生活上経済的援助を必要とし、次の全ての条件に該当する者。①日本以外の国籍を有し、東アジア・東南アジアの国・地域（詳細は「その他（1）」を参照）から修学または研究のために来日している私費留学生 ②大学院の修士課程および博士課程の在籍者、または入学決定者並びに博士課程3年終了者で博士学位取得のための継続在籍者 ③自然科学系および関連する学際分野（詳細は「その他（2）」を参照）を専攻している者 ④平成30年4月1日時点の年齢が修士課程は満30歳未満、博士課程は満35歳未満の者 ⑤平成30年4月以降、他からの奨学金を受けない者 ⑥年5回開催する奨学生例会（うち1回は2泊3日の研修旅行に参加できる者 ⑦奨学金支給終了後も当財団と通信等を継続する意志のある者 ⑧国際交流と親善に貢献しうる者 ⑨日本語で日常の会話ができる者

●その他：（1）応募資格に該当する東アジア・東南アジアの国・地域は、以下の通り。
（国・地域名は略称）

①東アジア：中国、韓国、モンゴル、台湾

②東南アジア：カンボジア、インドネシア、ラオス、マレーシア、ミャンマー、フィリピン、シンガポール、タイ、ベトナム
（2）応募資格に該当する自然科学系および関連する学際分野は、以下の範囲とする。

- ①工学、理学および農学の全般
- ②医学部の一部（分子病態学、公衆衛生学のみ）
- ③薬学部の一部（分子微生物学のみ）

●支給期間：原則として1年間

●給付金額：月額15万円（別途、例会出席および学会発表のための旅費などを補助。）

●募集人数：15名

●応募方法：実施団体に直接申込む

●募集締切：12月20日（水）（当日消印有効）

●実施団体・問合せ先：

公益財団法人 岩谷直治記念財団

〒104-0028 東京都中央区八重洲2-4-11 八重洲h+ビル3階

Tel 03-6225-2400

Fax 03-3231-7070

E-mail haga@iwatani.co.jp（担当：芳賀実）

URL <http://www.iwatani-foundation.or.jp/>

いっばんざいだんほうじん きょうりつこくさいこうりゅうしょうがくざいだんしょうがくきん

■ 一般財団法人 共立国際交流奨学財団奨学金

●対象：①アジア諸国の国籍を持つ私費留学生

(該当国) 大韓民国、中華人民共和国、台湾、香

港、モンゴル、ベトナム、ラオス、カンボジア、

タイ、ミャンマー、マレーシア、シンガポール、

インドネシア、フィリピン、インド、スリランカ、

パキスタン、バングラデシュ、ネパール、ブー

タン、東ティモール、ブルネイ、モルディブ

②主催者の指定する対象校 (専門学校、短大、

大学学部、修士、博士) に在籍する留学生

※ 対象校は財団ホームページ (URL) を参照

●応募方法：対象校である学校を通して応募す

る (学校推薦。個人応募は不可)

●支給期間：2 年間

●給付金額：月額 10 万円

●募集人数：15 名

●募集期間：2018 年 11 月 6 日 (月) ～ 1

月 31 日 (水) (当日消印有効)

●主催者：一般財団法人 共立国際交流奨学財団

〒101-0021 東京都千代田区外神田 2-18-8

(株式会社共立メンテナンス内)

Tel 03-5295-0205 Fax 03-5295-0206

URL <https://www.kif-org.com>

かぶしきがいしゃ きょうりつ しょうがくきんしょうがくきん

■ 株式会社 共立メンテナンス奨学基金奨学金

●対象：①アジア諸国の国籍を持つ私費留学生

該当国は上記「共立国際交流奨学財団奨学金」

と同じ ②主催者の指定する対象校 (大学・

大学院、専門学校、日本語学校) に在籍する

留学生

※ 対象校は主催者ホームページ (URL) を参照

●応募方法：対象校である学校を通して応募す

る (学校推薦。個人応募は不可)

●支給期間：1 年間

●給付金額：月額 6 万円

●募集人数：35 名

●募集期間：2017 年 11 月 6 日 (月) ～ 1

月 31 日 (水) (当日消印有効)

●主催者：一般財団法人 共立国際交流奨学財団

〒101-0021 東京都千代田区外神田 2-18-8

(株式会社共立メンテナンス内)

Tel 03-5295-0205 Fax 03-5295-0206

URL <https://www.kif-org.com>

留学生宿舎情報

よこはましこくさいがくせいいかいなん ねんどにゅうきょしゃほしゅう

■ 横浜市国際学生会館 2018 年度入居者募集

●申請資格：①留学生…横浜市内の大学・

短期大学の学部、大学院の修士・博士課程、

専修学校の専門課程のいずれかに在籍し、

「留学」の在留資格を有する人。家族の範囲は、

「家族滞在」または「留学」の在留資格を有す

る配偶者と子ども。

② RA…横浜市内の大学・短期大学の学部、大

学院の修士・博士課程、専修学校の専門課程の

いずれかに在籍する日本人又は永住者資格を有

する学生 (2018 年 4 月入学見込者を含む)。

●**寮費**：単身室（18㎡）月額2万円、家族室（38㎡）月額3万円。敷金礼金、管理費不要。
光熱水費、電話料金、Wi-Fi利用料は自己負担

●**入居期間**：2018年4月1日～2019年3月28日

●**申請方法**：HP（URL）参照

●**申請期間**：2018年1月4日（木）～1月

31日（水）

●**住所・問合せ先**：横浜市国際学生会館 入居係 〒230-0048 横浜市鶴見区本町通4-171-23

Tel 045-507-0121 Fax 045-507-2441

Email new.residents.yish@yoke.or.jp

URL <http://yoke.or.jp/yish/>

■ 東京都太田記念館 入館者募集

●**応募資格**：(1) 一般募集…①北京、バンコク、デリー（準州）、ハノイ、ジャカルタ、クアラルンプール、マニラ（首都圏）、シンガポール、ソウル、台北、ヤンゴン出身者 ②大学の学部生、大学院の修士・博士課程の正規生（研究生や聴講生は不可）、単身生活者（夫婦・家族用の部屋は無し） ③過去に太田記念館に在館したことがない人

(2) 北京優先枠募集…北京出身者は北京優先枠での応募も可能。詳しくはHP（URL）参照

●**寮費**：個室（16㎡）月額3万円

※ 光熱水費は自己負担

●**入居期間**：2018年4月1日～2020年3月25日。ただし、入館中に大学の課程が修了したら退館

●**応募方法**：HP（URL）参照

●**応募締切日**：2018年1月23日（火）（必着）

●**場所・問合せ先**：東京都太田記念館管理事務所 〒168-0082 東京都杉並区久我山2-16-14

Tel 03-3333-6311 Fax 03-3334-4047

URL <http://www.otakinen.com>

■ 2018年度 友愛学舎 第110期生募集

●**応募資格**：4年制大学（通学が1時間以内程度）の学部に入學予定の新1年生の男女で、4年間在舎する意志をもち、友愛学舎創立の精神に賛同する者。（詳細はHP（URL）参照）

●**募集人数**：4名（新1年生男女）

●**費用**：舎費月額2万5千円、設備費月額7千560円、入寮費10万円（入舎時のみ）、登録費年額5千円、活動費年額5千円

●**面接日**：前期1月20日（土）、21日（日）／後期3月10日（土）、11日（日）

●**応募締切日**：面接日の1週間前消印有効

●**場所・問合せ先**：早稲田奉仕園事務所

〒169-8616 東京都新宿区西早稲田2-3-1

Tel 03-3205-5402

email domitory@hoshien.or.jp

URL <https://www.hoshien.or.jp>

イベント情報

■ 第 15 回 日本語スピーチ大会

日本に住んで体験したこと、驚いたこと、自分の国とは違うことなどを、学んだ日本語を使って発表してくれる外国人の方を募集します。当日の観覧者も募集しています。

●日時：2018 年 3 月 3 日 (土) 13:30 ~ 17:00

●場所：座・高円寺 2 地下 2 階 (東京都杉並区高円寺北 2-1-2 / JR 高円寺駅より徒歩 5 分)

●発表者募集人数：10 名

●テーマ：「日本に来て感じたこと」、「自分の国のこと」など (発表時間は 5 分ほど)

●賞品：優秀賞などの他、参加者全員に記念品

●締切：2018 年 1 月 12 日 (金)

●申込方法：申込書 (主催者 HP に掲載) を郵送、Fax または E-mail などで申し込む。

●主催者：杉並区交流協会 Tel 03-5378-8833 Fax 03-5378-8844

E-mail info@suginami-kouryu.org URL [HP http://www.suginami-kouryu.org/](http://www.suginami-kouryu.org/)

MEMBERS

〈会費とご寄附の報告〉

2017 年 8 月

特別会員

(1 口)

(株) シーボン 港区
染谷 公久 坂東市

賛助会員

(1 口)

服部 泰子 豊田市
(株) 日吉 近江八幡市
雅留宮 久麿/澄子 野田市

正会員

(1 口)

山田 裕子 三鷹市
大里 浩秋 逗子市
稲垣 史 足立区
豊島 由久 所沢市
宮原 彬 朝霞市

代田 泰彦/ますよ

荒川 雄彦

小倉 美恵子

豊島 正大

築山 創介

福本 一

常木鍍金工業 (株)

ご寄附

稲垣 史

外山 経子

二村 美朝子

内山 敦之

深澤 のぞみ

酒井 杏郎

山口 憲明

所沢市

北杜市

川崎市

横浜市

北区

船橋市

北区

足立区

八王子市

練馬区

中野区

金沢市

渋谷区

日野市

2017 年 9 月

特別会員

(3 口)

(一財) 海外産業人材育成協会 足立区

(1 口)

立命館アジア太平洋大学 別府市

今西 淳子 文京区

株式会社 InfoDeliver 港区

賛助会員

(1 口)

(株) エレクトロデザイン 港区
昭和西川 (株) 中央区

正会員

(1 口)

長谷川 崇之 さいたま市
藤原 一枝 武蔵野市
平田 照 松戸市
鍋田 純一/由美 千葉市

ご寄附

田中 雅幸 江東区

栗原 静子 気仙沼市

松浦 秀嗣 国分寺市

牧 美保子 所沢市

増岡 信男 流山市

いつも変わらぬ
皆様の暖かい御支援に
感謝申し上げます

ご入会とご寄付のお願い

当協会は、政府の補助金を受けていない純民間運営の公益法人です。財源に限りがあり、皆様方からお送りいただく会費、寄付金は、本協会の活動を支える貴重な財源となっています。何卒ご理解、ご協力をお願い致します。

協会のあらまし

名 称：公益財団法人アジア学生文化協会
ASIAN STUDENTS CULTURAL ASSOCIATION

(ASCA)

所在地：東京都文京区本駒込2丁目12番地13号

代表者：理事長 小木曾 友

設 立：1957年（昭和32年）9月18日
故穂積五一氏創設

目 的：日本とアジア諸国の青年学生が共同生活を通じて、人間的和合と学術、文化および経済の交流をはかることにより、アジアの親善と世界の平和に貢献することを目的とする。

◇主な事業◇

- (1) 留学生宿舍の運営
- (2) 留学生日本語コースの運営（進学希望者向けの日本語を中心とする教育）
- (3) 留学生に対する情報提供支援
- (4) アジア語学セミナー
- (5) 帰国留学生のアジア文化会館同窓会、(社)日・タイ経済協力協会、ABK留学生友の会との連携・協力

◇会費（年額）◇

正会員 1口 1万円
賛助会員 1口 5万円
特別会員 1口 10万円

会員には広報誌「アジアの友」が無料配布されます。また、広報誌購入だけを希望される方には、購読料年間3千円（十税）でお送りいたします。

当財団に対する寄附金は、所得税、一部自治体の個人住民税、相続税、及び法人税の税制上の優遇措置があります。

2015年度より購読料に別途消費税をご負担いただくことになりました。何卒ご了承下さい。

新星学寮取り壊し・建替えのお知らせ

アジア文化会館の母体となり、多くの日本人学生、留学生の生活と学びの場であった新星学寮（文京区本郷）は木造建物の老朽化とそれに伴う耐震化の必要性に迫られていましたが、この度寮友有志の議論を経て、ようやく取り壊し並びに建替えが決まりました。2017年11月末から12月にかけての取り壊し、2018年1月から6月にかけて建替え工事を行う予定です。

これに伴いまして、只今建替えのための募金を募っております。詳細については下記ホームページをご覧ください。

<http://www.abk.or.jp/donation/index.html>

後記

2014年から新星学寮寮友有志による老朽化し耐震性の脆弱な寮の建替え検討会が始まり、その後当財団を加えた1年以上の議論と検討がなされ、また関係先との調整等を経てようやく取り壊し、建替えの運びとなった。新しい寮の方針、規約、運営等については今後も寮友とともども検討を重ねる必要がある。

本号は、創立60周年記念シンポジウムの特集となった。1950年代～1980年代のABK・新星学寮在寮の各国からの留学生に登壇していただき、それぞれの日本留学体験とその後の様々な日本との繋がりや向き合い方を通じて、今思う日本留学について、限られた時間にもかかわらず其々の方から貴重な話が聞けたと思う。今後の日本の若者との向き合い方、留学生との向き合い方等、ヒントになればと思う。(F)

アジアの友 2017年 10 - 11月号

2017年11月20日発行（通刊第529号）

年間購読（送料共）3,000円＋税 1部 500円＋税

発行人 小木曾 友

編集 アジアの友編集部

発行所 公益財団法人 アジア学生文化協会

東京都文京区本駒込2-12-13 (☎113-8642)

電話番号：03-3946-4121

ファクシミリ：03-3946-7599

振替口座：00150-0-56754

E-mail：tomo@abk.or.jp

ホームページ：(<http://www.abk.or.jp/>)

published by ASIAN STUDENTS CULTURAL ASSOCIATION
(ASIA BUNKA KAIKAN)

2-12-13, Honkomagome, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-8642, JAPAN

☎+81-3-3946-4121 ☎+81-3-3946-7599

Email：tomo@abk.or.jp

Home Page：(<http://www.abk.or.jp/>)

会員並びにご購読のお申込みはメール・電話または巻末の振替用紙にてお願いいたします。



学校法人 ABK 学館

ABK学館日本語学校

所在地 〒113-0021 東京都文京区本駒込 2-12-12

電話番号 +81-3-6912-0756

FAX +81-3-6912-0757

URL <http://abk.ac.jp>

E-mail info@abk.ac.jp



ABK
COLLEGE

2013年4月に完成した新校舎

新築3階建校舎。最新の耐震設計です。

- 留学生の絆が作る日本語学校 -

ABK学館日本語学校（英語名称：ABK COLLEGE）は1957年に設立された公益財団法人アジア学生文化協会が寮生活や日本語を学習した留学生、そして多くの関係者のご寄付と献身的な協力により、学校法人による日本語学校として2014年4月に開校しました。当校には姉妹校のABK日本語コース（公益財団法人アジア学生文化協会）もあり各種協力を行います。



授業風景イメージ



寮の一例



ABK日本語コース

ABK COLLEGE

ABK COLLEGE (学校法人ABK学館ABK学館日本語学校)			
東京都認可日本語課程(大学院・専門学校・就職・文化体験等)			
	4月入学 1年コース	10月入学 1年半コース	4月入学 2年コース
授業時間	860時間	1,290時間	1,720時間
入学検定料	20,000円		
入学金	80,000円		
授業料 (施設・教材費含む)	620,000円	930,000円	1,240,000円
姉妹校 ABK日本語コース(公益財団法人アジア学生文化協会)			
文部科学省指定大学進学準備教育課程			
	4月入学 1年コース	10月入学 1.5年コース	
授業時間	1,086時間	1,586時間	
入学検定料	20,000円		
入学金	80,000円(大学進学日本語課程) 95,000円(大学進学準備課程)		
授業料 (施設・教材費含む)	720,000円	1,080,000円	
所在地 〒113-8542 東京都文京区本駒込2-12-12			
電話 ☎+81-3-3546-2171 FAX ☎+81-3-6912-0759			
E-mail info@abk.ac.jp			

